

京都府弥栄町  
奈具岡遺跡発掘調査報告書

財團法人 古代學協會

昭和60年

## 目 次

### 序

第1章 はじめに ..... 1

　　第1節 立地と環境 ..... 1

　　第2節 調査の経過 ..... 3

第2章 調査の結果 ..... 9

　　第1節 方形周溝墓 ..... 9

　　第2節 南尾根古墳 ..... 13

　　第3節 土坑 ..... 16

　　第4節 住居址 ..... 18

　　第5節 ピット群など ..... 24

　　第6節 その他の遺物 ..... 26

第3章 後論 ..... 28

　　第1節 近畿地方北部の古式須恵器 ..... 28

　　第2節 まとめ ..... 34

付 載 「史料綜覧」丹後國人名・地名・社寺名

索引

## 図版目次

- |   |  |
|---|--|
| 図版第1 上：奈具岡遺跡遠景<br>下：北・中尾根発掘前全景  | 第4段左：S 4号土坑<br>右：N 1号方形周溝墓主体部                        |
| 図版第2 上：南尾根発掘前全景<br>下：南尾根古墳発掘前全景   | 図版第8 上：S 1号住居址全景<br>下：S 1号住居址遺物出土状態                  |
| 図版第3 上：南尾根発掘後全景(南より)<br>下：南尾根発掘後全景(北より)   | 図版第9 上：S 2・3・4号住居址全景<br>下：S 5号住居址全景                  |
| 図版第4 上：中尾根発掘後全景<br>下：北尾根発掘後全景   | 図版第10 上：C 1号住居址全景<br>下：N 1号住居址全景                     |
| 図版第5 上：S 1号方形周溝墓西溝および<br>S 2号方形周溝墓南溝<br>下：S 2号方形周溝墓全景                                   | 図版第11 上：S 11号土坑全景<br>下：S 11号土坑土器出土状態                 |
| 図版第6 上：S 3号方形周溝墓全景<br>下：N 1号溝状遺構全景  | 図版第12 上：南尾根古墳周溝全景<br>下：南尾根ピット群全景                     |
| 図版第7 第1段左：S 6号土坑<br>右：S 1号土坑<br>第2段左：S 10号土坑<br>右：S 8・9号土坑<br>第3段左：S 7号土坑<br>右：S 2・3号土坑 | 図版第13 上段：中尾根西斜面土器出土状態<br>中段：古墳周溝土器出土状態<br>下段：発掘終了後全景 |
|   | 図版第14 古墳出土土器、勾玉、鐵鎌                                   |
|   | 図版第15 住居址および土坑出土土器                                   |
|   | 図版第16 中尾根出土土器  |

## 挿図目次

- |                                     |     |                                     |    |
|-------------------------------------|-----|-------------------------------------|----|
| 第1図 丹後全國.....                       | 1   | 第9図 S 2・3号方形周溝墓共有<br>出土鉄鎌.....      | 12 |
| 第2図 弥栄町における遺跡分布図.....               | 2   | 第10図 N 1号方形周溝墓埋葬施設の<br>実測図.....     | 13 |
| 第3図 奈具岡遺跡全体図.....                   | 6   | 第11図 南尾根古墳外形測量図.....                | 13 |
| 第4図 発掘区遺構図.....                     | 7・8 | 第12図 南尾根古墳土層断面図.....                | 14 |
| 第5図 S 1号方形周溝墓西溝の<br>遺物出土状態.....     | 9   | 第13図 南尾根古墳下層および<br>近傍遺構図.....       | 14 |
| 第6図 S 2号方形周溝墓南溝の<br>遺物出土状態.....     | 10  | 第14図 南尾根古墳溝およびS 5号土坑<br>土器出土状態..... | 15 |
| 第7図 S 2・3号方形周溝墓、共有溝の<br>遺物出土状態..... | 11  | 第15図 南尾根、古墳溝および墳丘内<br>出土土器.....     | 15 |
| 第8図 南尾根方形周溝墓、北尾根溝状遺構<br>出土土器.....   | 12  |                                     |    |

第16図 S 2号土坑実測図	16	第28図 北尾根、南尾根のピット群 出土土器	21
第17図 S 3号土坑実測図	16	第29図 北尾根、中尾根、南尾根 出土土器	22
第18図 S 4号土坑実測図	16	第30図 中尾根西斜面黒土層中の 一括出土土器	23
第19図 S 6号土坑実測図	17	第31図 中尾根西斜面黒土層中の 土器出土状態	24
第20図 S 10号土坑実測図	17	第32図 弥生時代前期の土器	25
第21図 S 11号土坑墓、S 5号住居址 実測図	17	第33図 S 1号住居址出土の石器	26
第22図 S 11号土坑出土土器	18	第34図 近畿北部のI期須恵器出土遺跡 分布図	29
第23図 S 1号住居址実測図	19		
第24図 S 1号住居址出土土器	20		
第25図 S 1号住居址出土滑石勾玉	20		
第26図 C 1号住居址実測図	20		
第27図 C 1号住居址出土土器	21		

### 付 表 目 次

第1表 丹後弥栄町、越前福井市、 若狭小浜市の気象条件一覧表	3
第2表 奈具岡遺跡検出土坑一覧表	18

第3表 近畿北部のI期須恵器出土 遺跡地名表	30
---------------------------	----

## 例　　言

1. 本書は昭和59年4月16日から同年6月20日にかけて実施した、京都府竹野郡弥栄町大字溝谷小字奈具間に所在する遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査は、京都府教育委員会文化財保護課の要請をうけ、原図者・神村工業所との契約のもとに、(財)古代學協會・平安博物館が実施した。
3. 本書の執筆分担は以下の通りである。

第1章 第2章第4節, 同第5節, 第3章第2節

川西宏幸

第2章第1節

辻村純代

第2章第3節, 同第5節, 第3章第1節

山田邦和

第2章第2節, 同第4節, 同第5節, 同第6節

千喜良淳

第2章第6節

大下 明

付 載

藤本孝一

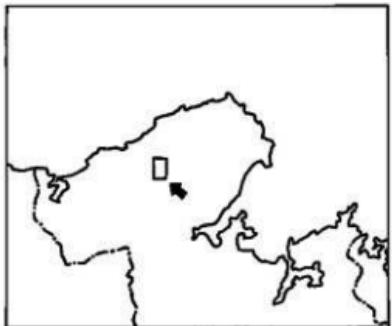
4. 編集は川西が担当し、実測・トレースは、山田邦和(同志社大学大学院), 原田昭一(同左), 千喜良淳(関西大学), 大下明(同左), 井口澄恵が分担した。

5. 各遺物の図版番号は、挿図番号と符合させた。

6. 出土品は、平安博物館での整理作業が終了したのち、京都府竹野郡弥栄町教育委員会に返却し、同所で保管する。

## 第1章 はじめに

### 第1節 立地と環境



第1図 丹後全図

奈具岡遺跡は、京都府竹野郡弥栄町溝谷に所在する。その位置する奥丹後半島は、若狭湾の西岸を面して日本海に突出し、標高683mの太鼓山を最高とする山岳・丘陵地帯からなる。竹野川が半島基部に源を発し、西部を縦断して、日本海に注ぐ。その間に、大宮、峰山、弥栄、丹後の各町をうるおし、それぞれに沖積地を形成している。最大の沖積地は峰山盆地であり、ついで弥栄地区がある。南北6km、東西1.5kmをはかる同地区の沖積地は、

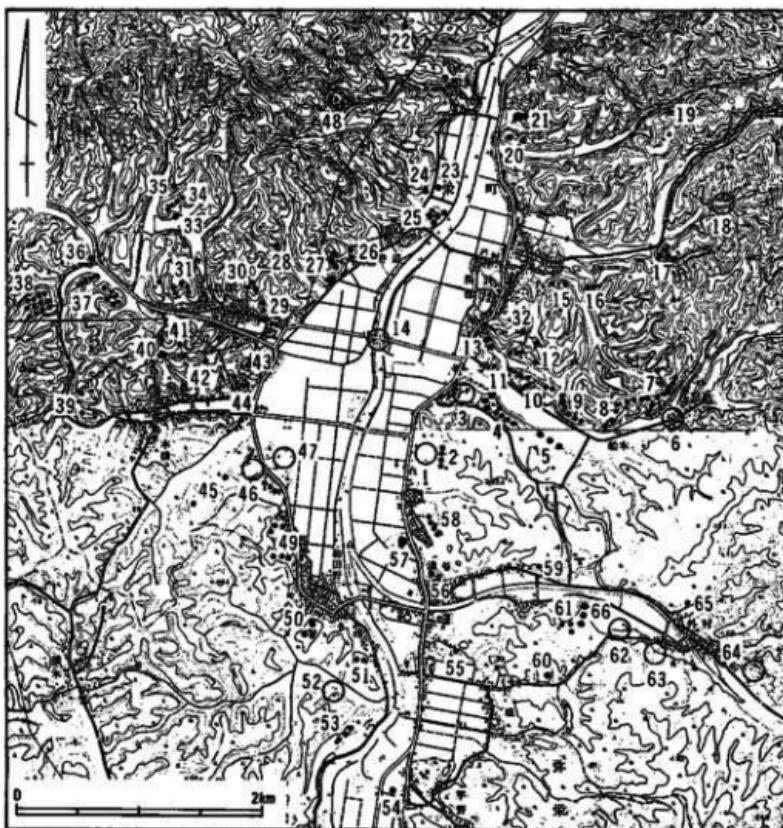
南北を山塊で封じられた長細い袋状を呈し、東西には、竹野川に流入する小河川によって形成された谷間地が複雑に分岐している。

また、竹野川ぞいには峰山盆地から日本海岸の丹後町間に至る間人街道が走る。いっぽう宮津街道が東南方の谷間に抜け、天橋立をのぞむ若狭湾方面に出る。そうして、これら両街道は弥栄町中央部の溝谷で交わる。また、交通の要衝である溝谷からは、さらに間人街道が分岐しており、対岸の和田野、鳥取を経て、山間の谷ぞいを網野町にむかう。

さて、弥栄地区の中央部に、北を船木、南を溝谷の深い谷にかぎられ、東部もまた支谷によってわかたれた、独立の山塊がある。標高62mを最高所とするこの低山塊から西に支脈がのびて、竹野川をのぞむところで、標高30m前後の、狭い台地をなす。今回、発掘調査の対象となった奈具岡遺跡は、花崗岩の風化土を地山とするこの台地上にある。

眺望のすぐれたこの台地から足下の沖積地をのぞむと、西方対岸の水田中に、弥栄町和田野坂野遺跡があり、近接する丘陵上には、坂野丘遺跡および坂野古墳群がある<sup>1)</sup>。さらに南方遠くの尾根上には、同町和田野太田古墳群<sup>2)</sup>がのぞまれる。また、視角には入らないが弥栄地区北方の陰部東岸に、全長105mをはかる同町最大の前方後円墳である黒部銚子山古墳が隆然とした姿をみせている。また、西方正面に位置する鳥取の集落を経て網野町に抜ける街道ぞいに、直径30mをはかる円墳の弥栄町鳥取ニゴレ古墳がある。

奈具岡遺跡がのる台地から北方に小谷を隔てて、奈具遺跡<sup>3)</sup>がある。遺跡の存在は明治年間から知られていたが、昭和46・54年に発掘調査を実施し、弥生時代中期の住居址の存在を確認



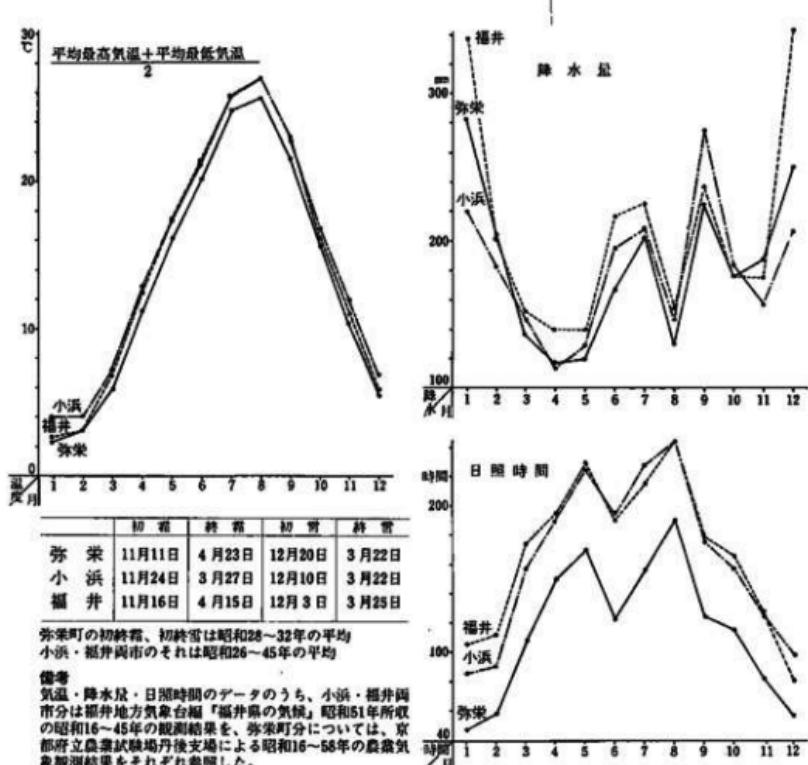
第2図 弥栄町における遺跡分布図

1. 奈具岡遺跡
2. 奈具岡古墳群
3. 奈具遺跡
4. 奈具古墳群
5. 小基古墳群
6. 家谷遺跡
7. コイロ古墳群
8. 中田古墳群
9. 奈具神社裏古墳
10. 福西古墳群
11. 新宮古墳群
12. 谷古墳群
13. 新谷古墳群
14. 鳥取橋遺跡
15. 大内古墳群
16. 小坂古墳群
17. 金谷古墳群
18. かせ谷遺跡
19. 福谷古墳
20. 弓木古墳群
21. 銚子山古墳
22. 岡田古墳
23. 国原古墳
24. 稲荷古墳
25. 穂曾長古墳群
26. 小宮谷古墳群
27. 桑田古墳群
28. 黒奥古墳群
29. 大將軍古墳群
30. 愛宕山古墳群
31. 宮ノ森古墳群
32. 栗原谷古墳
33. 安田古墳
34. ケンギョウの山古墳群
35. 石穴古墳群
36. ニグレ古墳群
37. 鳥取古墳群
38. 速所古墳群
39. 奥ノ院古墳群
40. 谷奥古墳群
41. 黒國古墳
42. 留主田古墳
43. 赤井古墳
44. 堀谷古墳群
45. オテンジ古墳群
46. 板野遺跡
47. 板野丘遺跡
48. 塚田古墳群
49. 寺谷古墳群
50. 愛宕山古墳群
51. 古天皇古墳
52. 桃のさか遺跡
53. 太田古墳群
54. 舟岡古墳
55. いもじや古墳
56. 竜源古墳
57. 丸山古墳
58. 久原古墳群
59. 八所古墳
60. 飛谷横穴
61. 立山古墳群
62. フキ岡遺跡
63. 城泰寺遺跡
64. 外村遺跡
65. 住地横穴
66. 鼻尾塚古墳群

した。同期にはじまり、その後もなお断続的にしろ存続したようであり、鎌倉時代の溝道構が発掘されている。

いっぽう、奈良間遺跡については、われわれの調査に先だって、昭和56年に試掘調査が実施された<sup>4)</sup>。その結果、3丘陵にまたがる台地全域に遺物の存在がみとめられ50000m<sup>2</sup>を越す大遺跡であることが知られるに至った。主要な出土遺構として、弥生時代後期および古墳時代中期の住居址各1基があり、出土遺物には弥生時代後期後半から平安時代後期に及ぶ土器がある。今回発掘の対象となったのは、前回調査区域の西方に隣接する台地西縁部であり、面積5500m<sup>2</sup>をはかる。

第1表 丹後弥栄町、越前福井市、若狭小浜市の気象条件一覧表



## 第2節 調査の経過

本丘陵西縁部が、弥栄町でコンクリートブロック製造業を営む神村工業所の工場拡張地の対象となるので、京都府教育委員会文化財保護課に対し同工業所から発掘調査の依頼がなされた。

#### 4 第1節 立地と環境

しかし、同課の実施するところとならず、平安博物館に調査の要請があった。この要請をうけ、同課の仲介のもとに、昭和59年3月26日付をもって、平安博物館と神村工業所との間で、発掘調査から報告書作成に至る実施契約を交した。

調査は同年4月16日にはじまり、同年6月20日に終了した。その間の調査団の組織は以下の通りである。

事務局：財團法人古代學協會・平安博物館

調査団：財團法人古代學協會・平安博物館

調査員：角田文衛(平安博物館館長兼教授)、片岡 遼(平安博物館助教授)、鈴木忠司(同左)、藤本幸一(平安博物館講師)、川西玄幸(同左・調査主任)

調査補助員：辻村純代(京都大学研修員)、山田邦和(同志社大学大学院)、原田昭一(同左)、森下浩行(同左)、細川修平(同志社大学学生)、千喜良淳(関西大学学生)、宮本純二(平安博物館嘱託)、津田美賀子

作業員：芦田徳一、安達為夫、新井弥太郎、入江三郎、岩佐哲彦、上田忠司、上田辰乙、宇野誠一、宇野敏雄、梅田喜代次郎、梅田重子、梅田昭三、梅田貴之、大江隆司、沖野修二、沖野繁乃、加藤新市、阿田猛、後藤正、小林賢次郎、嵯峨根清一、田中義亮、高倉仁三郎、田中行一、田家忠、田家知直、坪倉明夫、坪倉正一、坪倉勇一、道家泰彦、藤原久枝、堀江健治、松井耕一、松村仁、村上義一、村上武士、行待武夫、由良富治、由良正安、吉岡邦雄、吉岡清市、吉岡博、吉村保。

調査区域は鞍部によって隔てられた3丘陵にまたがり、標高25~31m、平地との比高差5~15mをはかる。北から順に北尾根、中尾根、南尾根と名付けた。北尾根の調査区は雑木に覆われた斜面であり、中尾根の調査および南尾根の調査区は、一部畠として開墾されていたらしく地表に、畝の痕をとどめるが、現状では雑木林であった。なお、丘陵末端部は工場用地としてすでに削平され、地山が露出する崖面となっていた。

調査開始から終了に至る経過を以下に示す。

4月16日~4月20日 伐栽、地形測量

4月20日~5月21日 南尾根表土除去、および発掘を併行

5月28日~6月3日 北尾根表土除去を併行

6月3日~6月6日 南尾根造構実測・清掃併行

中尾根の実測併行

6月6日~6月7日 南尾根・中尾根写真撮影

6月8日~6月13日 南尾根実測、中尾根・北尾根発掘継続

6月13日~6月15日 北尾根実測・写真撮影

6月15日~6月20日 中尾根実測・写真撮影

6月17日 現地説明会

6月20日 器材撤収

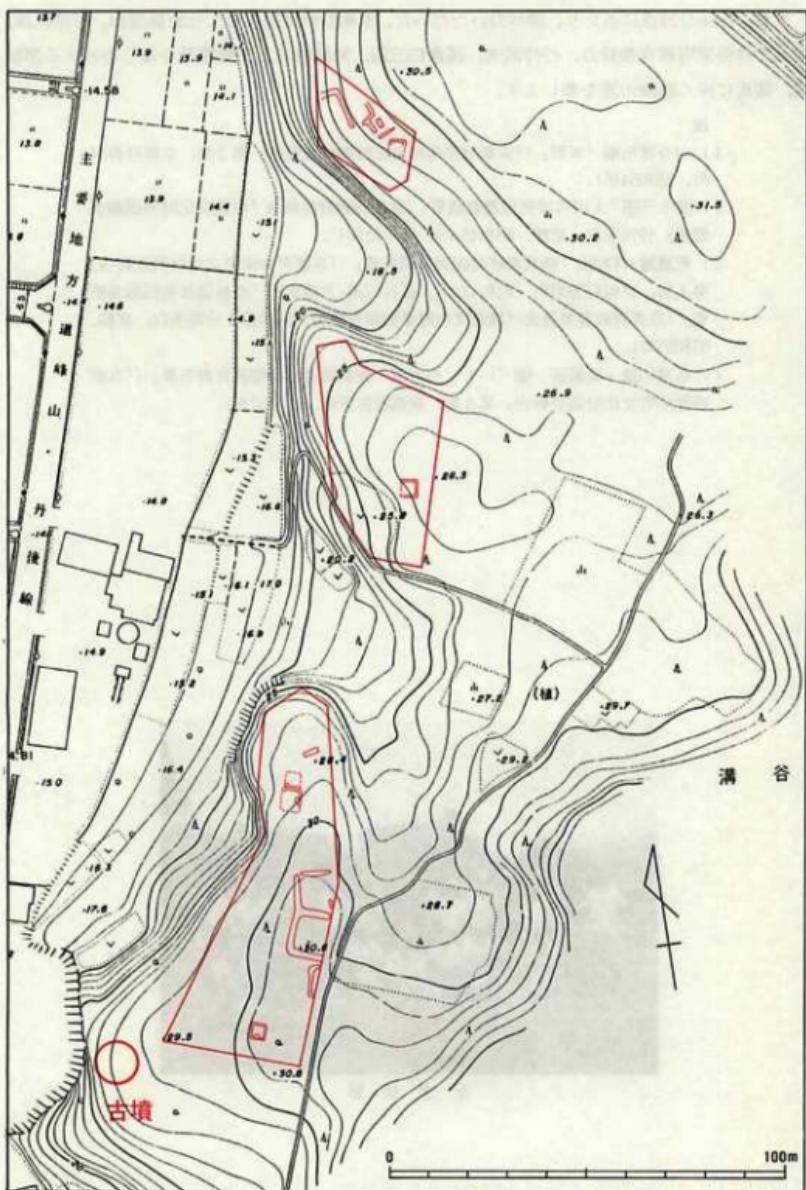
なお、今回の調査にあたり、御尽力いただいた、京都府教育委員会文化財保護課、杉原和雄、地元では弥栄町教育委員会、行待武夫、高倉仁三郎、沖野修二、沖野繁乃をはじめとする諸機関、諸氏に深く感謝の意を表します。

#### 注

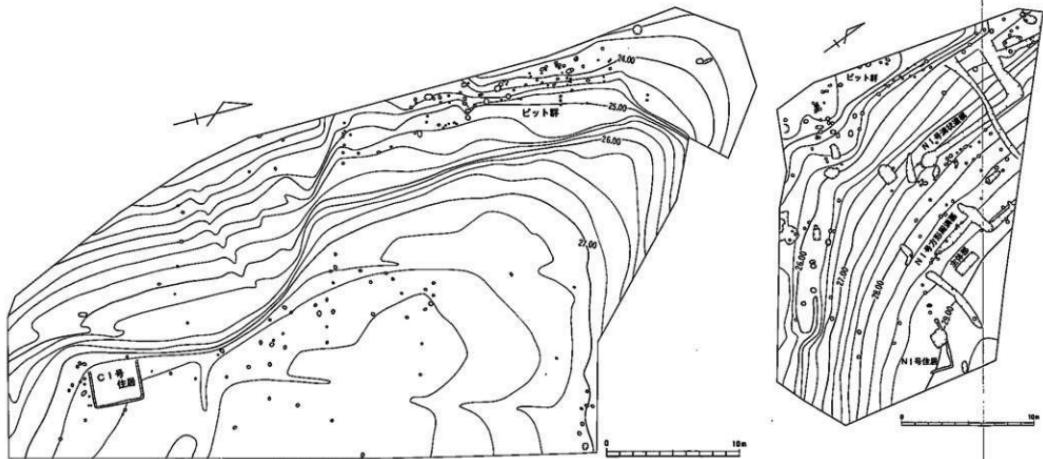
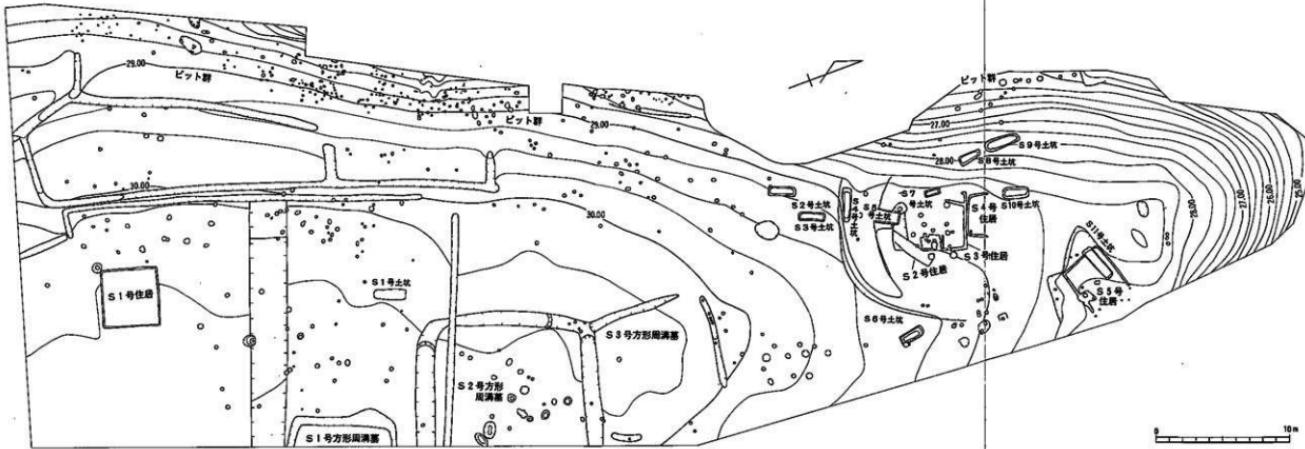
- 1) 中谷雅治編『坂野』(『京都府弥栄町文化財調査報告書』第2集、京都府弥栄町、昭和54年)。
- 2) 堤圭三郎「太田古墳発掘調査概要」(京都府教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報」1970所収、京都、昭和45年)。注1と同じ。
- 3) 穂龍雄・林和広「奈具遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第1集、京都府弥栄町、昭和47年)。長谷川達・大槻真純「奈具遺跡発掘調査概要」(京都府教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報」1980第1分冊所収、京都、昭和55年)。
- 4) 杉原和雄・岡崎研一編『いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書』(『京都府弥栄町文化財調査報告』第3集、京都府弥栄町、昭和57年)。



記念撮影



第3図 奈具同遺跡全体図



第4図 発掘区遺構図  
上 南尾根、左下 中尾根、右下 北尾根

## 第2章 調査の結果

### 第1節 方形周溝墓

南尾根では調査区の中央東端、耕土層直下の地山面で標高30.0～30.5mの比較的平坦な場所に築造された方形周溝墓3基を検出した。南よりS1・S2・S3号方形周溝墓と呼び、また北尾根で検出した1基はN1号方形周溝墓と呼ぶことにする。

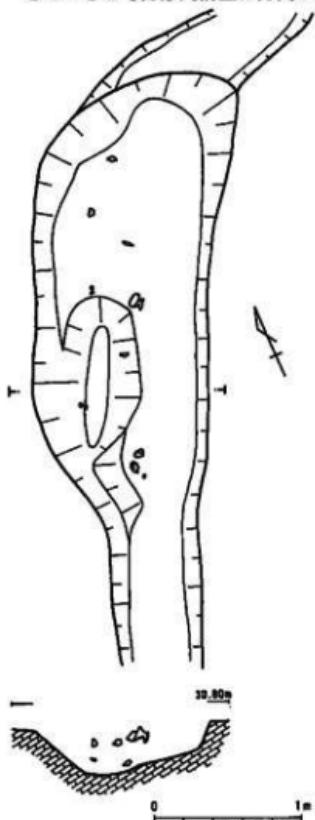
S1・S2号方形周溝墓は方向が平行するのに対し、S3号方形周溝墓はS2号方形周溝墓と溝を共有しながら主軸を西に振る。S1号方形周溝墓と他の2基との時間的先後関係は不明であるが、S2号方形周溝墓とS3号方形周溝墓とは共有する溝の切りあいから、S2→S3の先後関係を確認した。

**S1号方形周溝墓** 西端部を検出したにとどまるが、西溝の南、北溝内辺間長は7.5m、溝のほぼ中間では幅0.6m、深さ0.35mをそれぞれ測る。溝の断面は舟底状を呈する。西溝の北半3.2mにわたって溝の幅が広くなり、深さも30cm程度深くなる。遺物の大半はこの範囲から出土しているが、溝底に接するものではなく、すべて埋土中からの出土である。なお周溝の北西隅と南西隅では溝底が約10cm浅くなる。

壺(第8図10)は、直線的に開く口縁部の下端が肥厚して段をつくり、扁球状の肩の張った体部をもつ。外面は縦位の細かなハケメで調整し、内面は肩部から左回りのケズリを施している。胎土は長石、石英、赤色粒をかなり含み、とくに赤色粒は直径4mmの大粒をみると、壺形土器の底部と思われる土器(同図19)も、この赤色粒を含む。

高杯(第8図9)は杯部の上半を欠き、丸味をもった杯部の底部と脚部が残る。軸部は短かく、脚部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。胎土には石英、赤色粒を多量に含む。

**S2号方形周溝墓** 東溝は調査区外となるため東西長は確認していないが、南北長は11.2mを測り、3基のうち

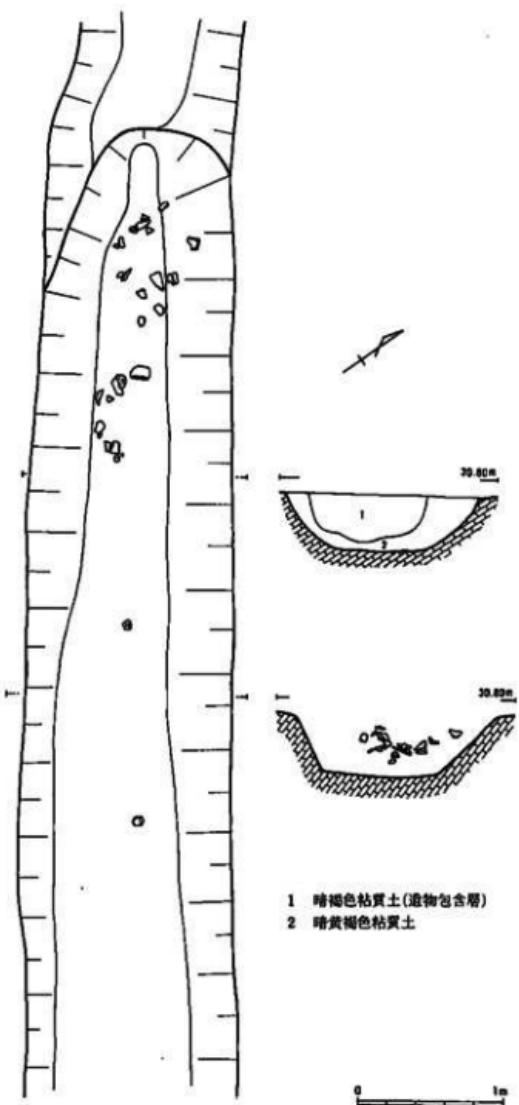


第5図 S1号方形周溝墓西溝の遺物出土状態

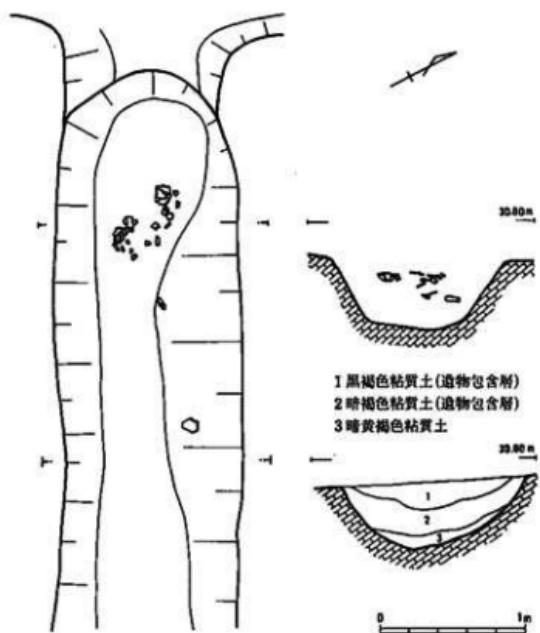
では最も規模が大きい。また溝の幅と深さにおいても他の2基にまさり、それぞれ南溝では1.36mと0.4m、西溝では1.05mと0.37m、北溝では1.20mと0.48mを測る。S 1号方形周溝墓と同様

に、北西隅と南西隅では、溝底が約10cm浅くなる。遺物は主として周溝の西半から出土し、とくに周溝の隅部分に集中する傾向がある。溝底直上には約10cmの厚さで暗黄褐色粘質土が堆積し、その上に炭粒を含む暗褐色粘質土層と黒褐色粘質土層が累積する。このうち暗黄褐色粘質土層は遺物を含まない。北溝はS 3号方形周溝墓と共有するため、いずれに伴なうかは不明だが出土遺物はここで一括して取り上げる。

壺は口縁部の形態により、A有段口縁のもの(第8図6)と、B無段口縁のもの(同図1・2・3・13・14)とがある。有段口縁6は口縁部外面には擾凹線を施す。肩部から胴部にかけては、細かな縦位のハケ調整、内面はナデ調整を施す。この土器には赤色粒が含まれない。無段口縁壺はさらに、ゆるやかに外反するものの(1)、直線的に外反するものの(2・13・14)、内弯気味に立ち上るもの(3)に細分できる。1は、張り出した胴部と小平底をもつ。外面は縦位のハケ調整がなされ、底部内面にはケズリの痕跡を認める。



第8図 S 2号方形周溝墓南溝の遺物出土状態



第7図 S2・3号方形周溝墓共有溝の遺物出土状態

内面肩部には輪積成形の痕が残る。これは14や3により頗著で、さらに指痕も残る。大粒の石英、長石粒を多量に含むのは1のみで、赤色粒を含むのは2・3・13・14である。土器底部7・18は1の底部を含め、すべて小平底であるが18は後期的な特徴をもつ。

壺は口縁部の形態により、有段口縁のもの(第8図16)と、くの字形に外反するものの(同図4・8・11・12)に分類できる。このうち11については弥生時代中期の土器であることはほぼ誤りない。有段口縁壺16は、短かい口縁部に縦凹線を施し、内外面ともにナデ調整を行

なう。肩部内面には一部ケズリの痕跡を認める。くの字口縁壺14は扁球状の体部をもつ小型品で、磨滅が著しい。壺形土器には赤色粒を含むものはない。

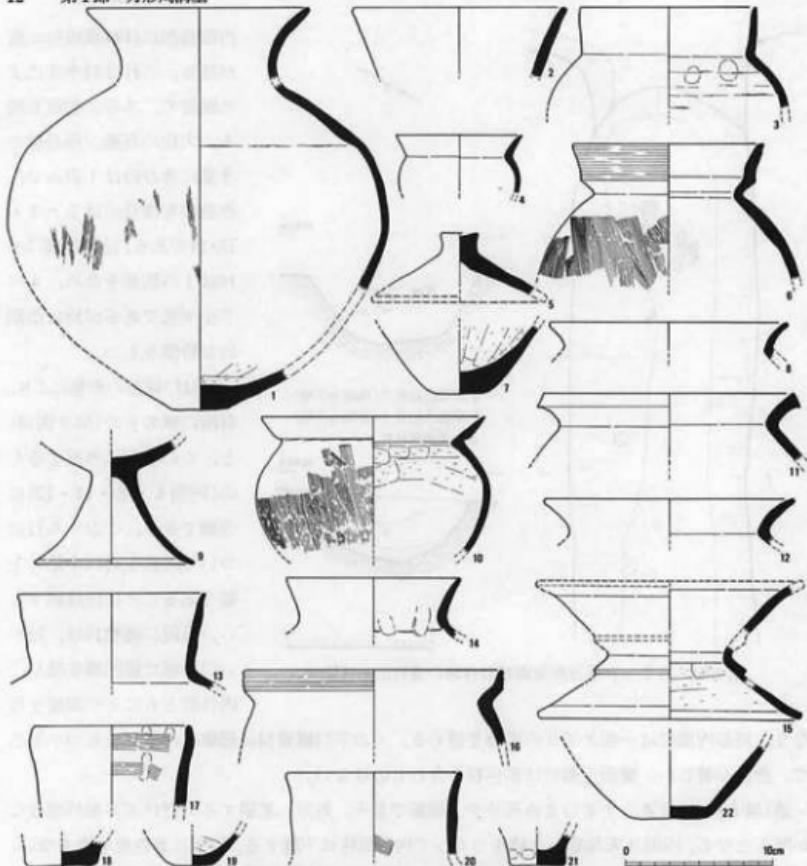
蓋(第8図5)は直立するつまみ部分を上端部で若干、外方へ拡張する分だけ天井部外面はなか凹みとなる。内面は天井部から稜をつくって内寄気味に下降する。胎土は赤色粒を含まない。

鼓形器台(第8図15)は上台、脚台ともに大きく拡がって扁平な形である。脚台内面を左回りのケズリで調整し、上台内面および外面全体にナデを加える。石英粒を含み、赤色粒をみない。

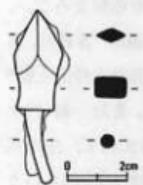
S1号方形周溝墓出土の土器も含め、これらの土器は京都府中郡峰山町古殿遺跡<sup>11</sup> S E 03, Bトレンチ S D 04出土土器に類似する。加えて鼓形器台は島根県東出雲町大木椎現山1号出土例<sup>12</sup>と同型式であることなどを勘案すると、庄内式に併行する土器群と推定される。また一般に“クサリ縁”と呼んでいる赤色粒は本遺跡出土の弥生時代前期・中期の土器には含まれず、庄内式から布留式併行期の土器にこれを含むものが多いという点では弥栄町周辺の地域的特色といふにとどまらず、時期的な問題として把えられるかもしれない。

鉄錐(第9図)は頭部が三角形、断面菱形を呈し、定角式に分類できる。錐身の最大長と最大幅の比は2:1である。

S3号方形周溝墓 残存状態はよくないものの、溝の内辺間長は南北9m、東西8.8mを測り、



第8図 南尾根方形周溝墓、北尾根溝状遺構出土土器



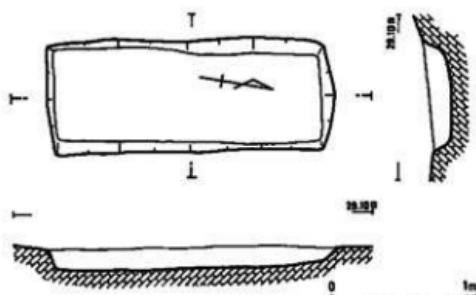
第9図 S2・3号方形周溝墓共に溝出土鐵鏃

正方形プランであることを確認した。S2号方形周溝墓と共有する南溝を除いて、残りのよい西溝では幅、深さはそれぞれ0.55mと0.23mを測り、尾根の北斜面にかかる北溝は地山の流出などにより深さ11cm遺存するにとどまる。

S1・S2号方形周溝墓において周溝隅では溝底が浅くなることを確認したが、ここでは遺構全体の残りが悪いために北溝両端隅では溝が消失する。埋土の層序はS2号方形周溝墓と同じであるが、最上位に堆積する黒褐色粘質土は西溝の南半にしか残らず、南溝以外からは遺物が出土しなかった。

N1号方形周溝墓 北尾根発掘区の東端、丘陵頂部のゆるやかな傾斜面上に立地する。

墓域は、三本の溝を掘削することによって区画する。墓域の東側には溝を確認していない。



第10図 N1号方形周溝墓埋葬施設実測図

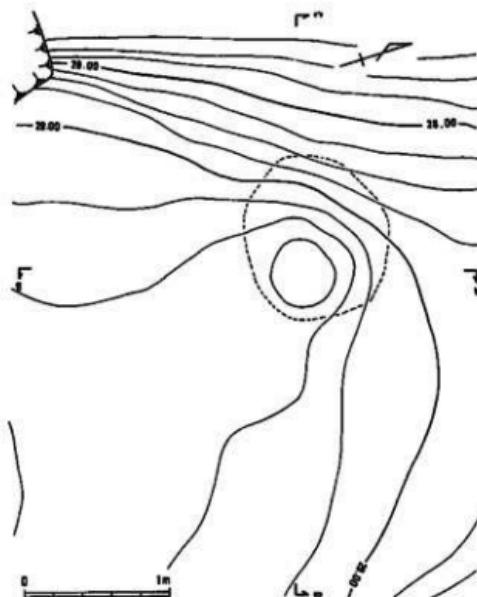
規模は、溝の内辺で南北4.8m、東西5.7mを測る。溝の規模は南側溝で長さ5.7m、幅0.5mを、西側溝で長さ3.8m、幅0.6mを、北側溝で長さ3.8m、幅1.0mを、それぞれ測る。

主体部は墓域中央部のやや西よりに堀られた土坑である。形状は長方形を呈する。規模は長さ1.94m、幅0.76m、深さ0.13mを測る。主軸はほぼ南北である(N-10'-W)。

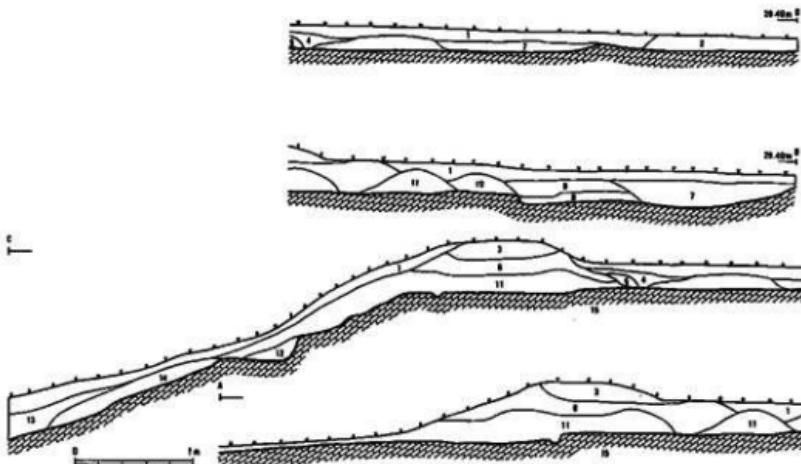
北側溝および主体部埋土から弥生土器の破片が出土した。土器は細片で、観察に耐えるものはない。

## 第2節 南尾根古墳

南尾根の北西部の緩斜面に位置する。墳頂部の標高は29.75mである。墳丘は崩壊し原形を留めない。現状では円形を呈し直径約5mをはかる。土層断面をみると、墳丘は盛土(第12図3～6)、旧表土(同図10・11)から成る。旧表土から土師器の甕(第15図4)小型丸底壺(同図8)が出土した。旧表土下から住居址を3基(S2～4号住居址)切り合った状態で検出した。主体部は墳丘が著しく崩壊していたためか、精査したにもかかわらず検出に至らなかった。墳丘の南側外縁を画する幅2m深さ0.4mの溝を検出した。溝内から土師器の甕2個(同図5・7)、須恵器の杯蓋1個(同図6)が出土した。また、溝南側から古墳築造前の土坑(S



第11図 南尾根古墳外形測量図



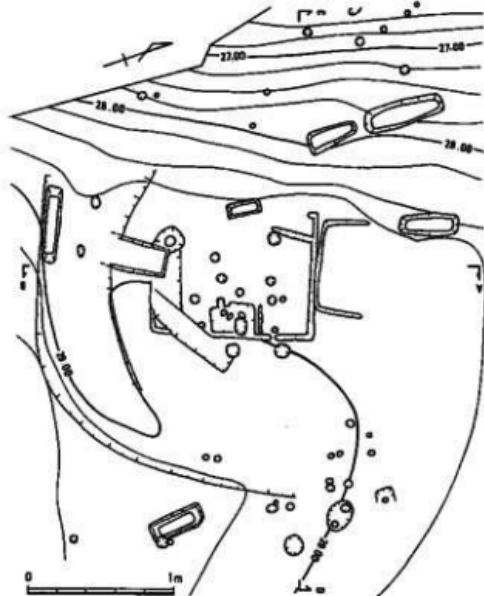
第12図 南尾根古墳土層断面図

1～2：表土(1-暗茶褐色土, 2-黒褐色土) 3～6：盛土(3-暗赤褐色土, 4-淡黄褐色土, 5-黄褐色土, 6-黄褐色土) 7：溝埋土(暗茶褐色土) 8, 9：S-5号土坑埋土(8-暗黄褐色土, 9-暗赤褐色土) 10, 11：旧表土(10-暗茶褐色土, 11-暗灰褐色土) 12：S-7号土坑埋土(黒褐色土) 13：流土(暗灰褐色土) 14：地山の流土(暗赤褐色土) 15：地山(赤褐色土)

7号)を検出した。

まず古墳出土土器について述べる。杯蓋(第15図6)は天井部には反時計回りのロクロを使用した回転ケズリを施す。T K23型式に属する。椀(同図4・7)は扁平な脚部に外反する口縁部がつく。須恵器の示す年代観と矛盾しないことから、古墳の築造時期は五世紀後半と考える。

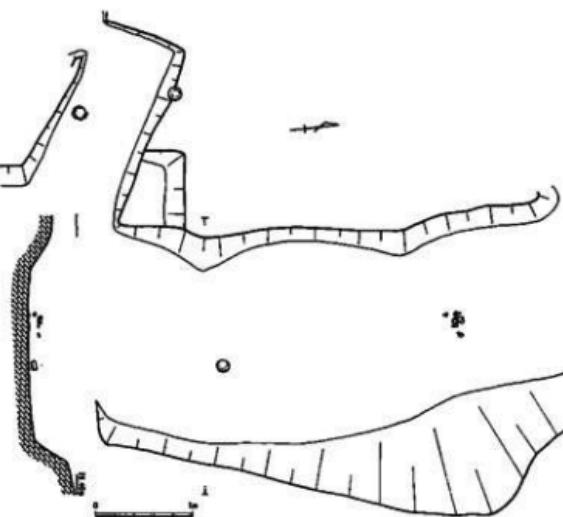
つぎに墳丘下出土土器について述べる。甕(第15図3・4)は口縁端部が内側に肥厚し、布留式の影響を強く受けたものである。京都府中郡峰山町古殿遺跡<sup>33</sup>Dトレンチ出土の甕で布留I～II式に比定されているものに酷似する。小型



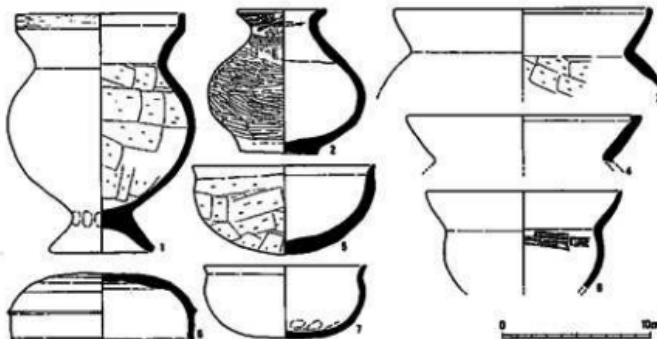
第13図 南尾根古墳下層および近傍遺構図

丸底壺(同図8)も胴部最大径を上半部に有することや、内面にハケを加えその後にナデを施すことから、布留式を4期区分した際のII式<sup>40</sup>に属する。両土器ともS3号住居址直上から出土しており、同住居址に伴う可能性が強い。

また、墳丘下からは弥生土器も出土している。壺(第15図2)は胴部を大きく張り、外面はハケ調整の後、丁寧なミガキを加える。形態、調整より、弥生時代前期にあたろう。

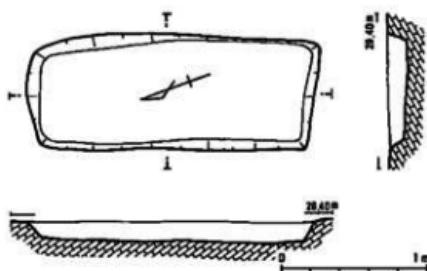


第14図 南尾根古墳溝およびS5号土坑土器出土状態

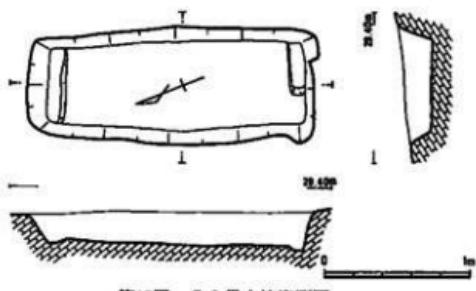


第15図 南尾根、古墳溝および墳丘内出土土器

## 第3節 土坑



第16図 S2号土坑実測図



第17図 S3号土坑実測図

**構造** 南尾根頂部の平坦面に、11基の土坑が分布する。S1号土坑は同尾根中央部に、S2号からS11号までの各土坑は同尾根北端部に、それぞれ位置する。

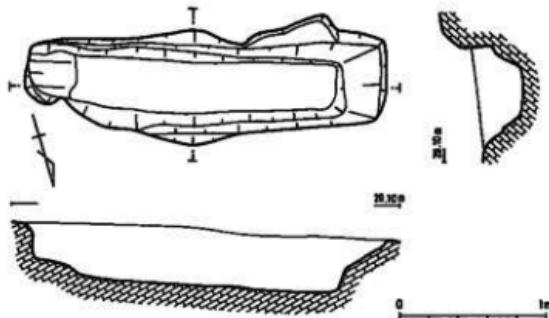
検出した11基のうち、S2・4・5・6・11号各土坑は、その構造や出土遺物から、土坑墓であると考える。他の各土坑については、土坑墓と断定するだけの決め手がない。

土坑は、主軸の方位により四つに大別できる。ほぼ南北をしめすもの(S6~9号各土坑)、南北より、やや東にふるもの(S1~3・5・10号土坑)、ほぼ東西をしめすもの(S4号土坑)、東北-西南をしめすもの(S11号土坑)である。平面的な規模では、S2・3・6・10号各土坑は、相似た大きさをも

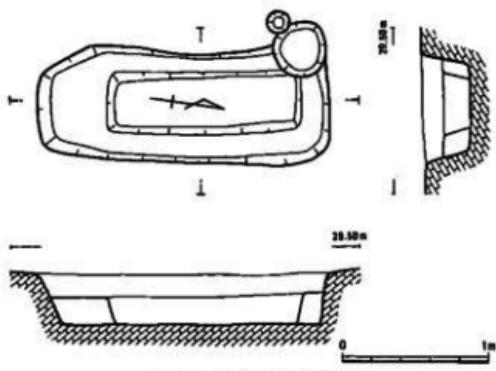
つ。

S2号土坑は、坑底の西端を浅い溝状に掘り込む。組合式木棺の小口板を安定させるためのものであろう。S4号土坑はいわゆる二段墓坑である。S6号土坑からは木棺の痕跡を検出し得た。

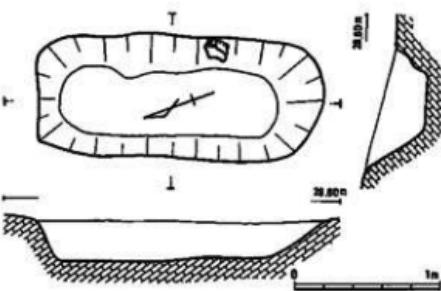
**出土遺物** 遺物を出土したのはS5・10・11号各土坑である。



第18図 S4号土坑実測図



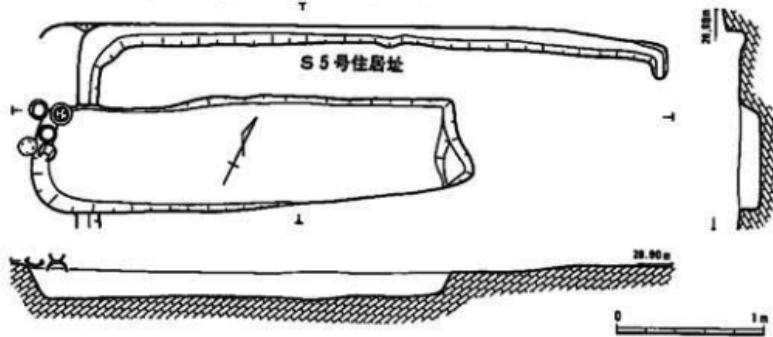
第19図 S6号土坑実測図



第20図 S10号土坑実測図

から鉄片が出土した。壺は庄内式期に併行する。

**小結** 11基の土坑のうち、出土遺物から時期を推定することができるものは3基にすぎない。

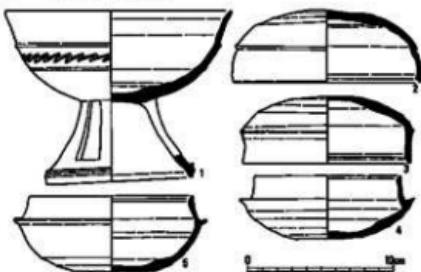


第21図 S11号土坑墓、S5号住居址実測図

S5号土坑では、土坑直上から弥生土器台付壺(第15図1)が出土した。外側はナデ、内側は上方からみて反時計回りのケズリを施す。時期は弥生時代後期であろう。

S11号土坑では、土坑の西端で、埴土の直上から、須恵器杯蓋2点、同杯身2点、同無蓋高杯1点(第22図)が出土した。杯身は正位で、杯蓋と無蓋高杯は逆位で出土している。蓋杯は、2と5・3と4がそれぞれセットになると思われる。2と5は反時計回りの、3と4は時計回りのロクロを使用したケズリ調整を施す。大阪府南部窯址群編年によるI期後半(森編年)・I期TK23型式(田辯編年)に併行し、実年代は5世紀後葉のものと考える。

S10号土坑では、東側肩部から土師器壺(第29図27)が、坑底



第22図 S11号土坑出土土器

が二段土坑であることを考慮し、古墳時代に属する可能性が高いと判断したい。

しかし、弥生時代後期から古墳時代初頭に比定できるS5・10号両土坑が、S1～3・6～9号各土坑と、規模や主軸の方位が似ることに注目するならば、後者の一群もまた、同時期の所産である可能性を指摘できよう。S11号土坑は、出土須恵器からみて、5世紀後葉のものであることが知られる。S4号土坑の時期はよくわからないけれども、同土坑の構造

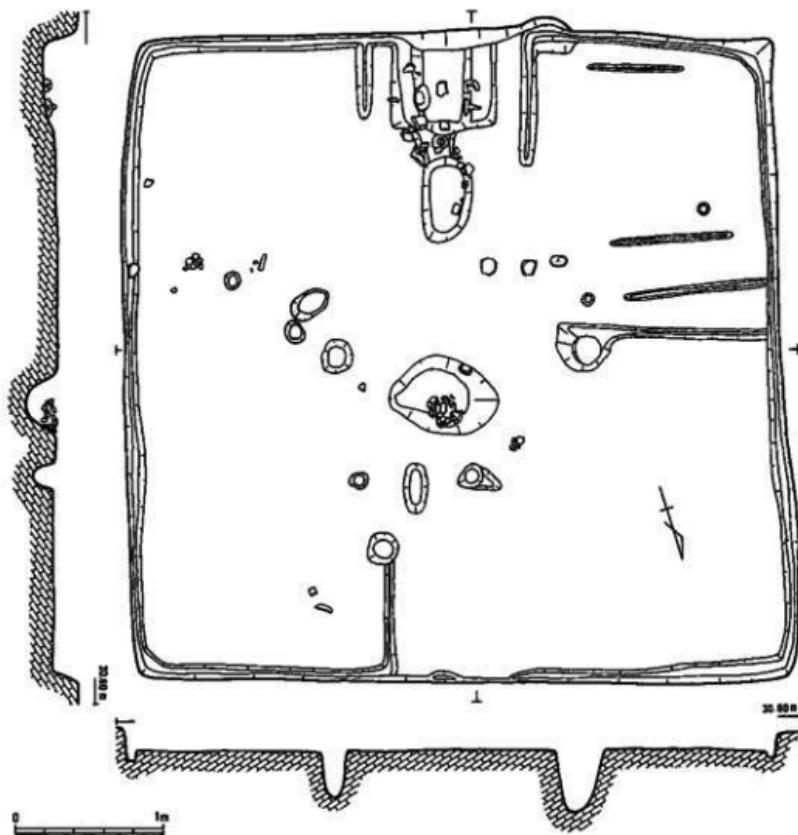
第2表 奈良県遺跡出土坑一覧表

土坑名	規模(単位cm)			主軸方位	出土遺物
	長さ	幅	深さ		
S1号	243	76	28	N-20°-E	
S2号	194	80	24	N-25°-E	
S3号	194	79	13	N-20°-E	
S4号	247	62	40	N-73°-W	
(二段目215)	(同42)	(同18)			
S5号	185以上	110	20	N-30°-E	弥生土器壺(第15図)
S6号	197	80	34	N-9°-W	
(木棺部130)	(同43)	(同18)			
S7号	115	48	14	N-5°-E	
S8号	170	70	45	N-8°-W	
S9号	280	85	32	N-1°-W	
S10号	195	75	28	N-18°-E	
S11号	288	78	20	N-72°-E	土師器壺・鉄片 須恵器杯蓋2 同杯身 2 同高杯1(第22図)

## 第4節 住居址

S1号住居址(第23図、第24図)南尾根調査区南端、表土下約20cmで検出された。プランは東西4.5m、南北4.3mをはかり、ほぼ正方形を呈する。壁は約10cm残存し、住居址外縁に浅い側溝がめぐり、住居址内を区画する溝も検出した。柱穴は2個検出した。住居址南壁中央部で貯蔵穴を検出し、内部から土師器の高杯(第24図6・13)壺(同図5)などが出土した。貯蔵穴の深さは床面より30cmをはかる。住居址中央部で直径約60cm、深さ20cmの浅いピットを検出した。北西部床面直上から滑石勾玉(第25図)が出土した。

次に出土遺物について述べる。高杯(第24図6・9・12)はいずれも杯底部から口縁部にかけてわずかに段を有する。高杯(同図13)は脚内面にケズリをみる。壺(同図8)は外面にタテハケを施し、内面にケズリを加える。これらの土器は、京都府中郡峰山町古殿遺跡Dトレンチ出土土器の壺で布留I～II式に比定されているもの<sup>9</sup>に酷似する。壺(同図4)も同時期のものと思われる。椀(同図10、11)は脚を持ち、このうち10は京都府綾部市青野南遺跡で青野II期<sup>10</sup>とされた



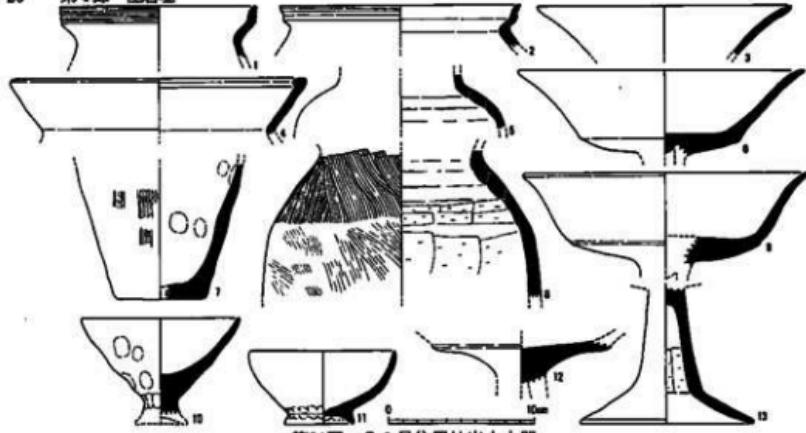
第23図 S1号住居址実測図

ものに類例をみとめる。青野II期は弥生時代後期から古墳時代初頭を包括するというが、当資料は脚台が未発達なことから弥生時代後期の可能性を考えておきたい。勾玉(第25図)は滑石製で、片面穿孔を有する。

埋土中から甕(第24図1・2)、底部(同図7)、叩石(第33図1)、石斧(同図2)が出土した。甕(第24図1・2)は弥生時代後期に属する。叩石、石斧についてはその他の遺物の項で述べる。

出土した高杯が段を有することや、甕(第24図4)、壺(同図8)が4期区分の布留II式<sup>7)</sup>に比定されることなどから、S1号住居址は同時期に属すると推定される。

**S2・3号住居址** 南尾根北部の古墳の墳丘下で3基の住居址を検出した。いずれも丘陵頂部の西端を占める。このうち2・3号の2基は方向がずれ、切り合った状態で出土した。切ら





第27図 C 1号住居址出土土器

ない。中央付近の床面に炉跡とおぼしき焼土塊がみられ、東辺中央でいわゆる貯蔵用ピットと礫群を検出した。床面上に小ピット群をみると、本住居址に伴う柱穴とは確定しえなかった。伴出土器のうち図示したもののとして図8・図22がある。布留式併行様式としては古相をなす。

**S 4号住居址** S 3号住居址の北に接して1基の住居址を検出した。S 4号としたこの住居址は、北半部が地山の流出によって遺存しない。東西3.1mをはかり、外縁に小溝がめぐる。出土土器は、いずれも細片であり、図示にたえないが、布留式併行様式の古相とみられ、S 3号住居址出土土器よりも、いくぶん古い特徴をもつようである。

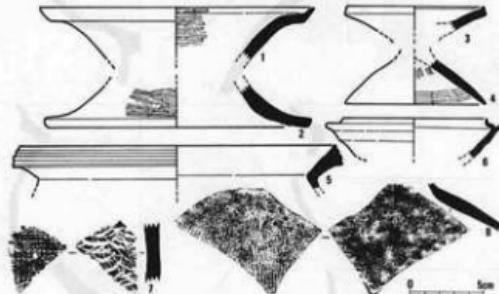
**S 5号住居址** 南尾根北端で1住居址を検出した。S 5号と呼んだこの住居址は、4.3×3.6mの規模をはかり、外縁に小溝がめぐる。南辺に貯蔵用ピットらしき造構がある。床面が土坑墓に切られ、東辺が流出しているなど後世の擾乱があるので、伴出土器の認定には至らない。近傍出土土器として、第29図20・21・23がある。

**C 1号住居址** (第26図)は中尾根調査区南部で検出した。東西2.2m、南北3.8mを残す。緩斜面に営まれていたため造構の4分の3は流出していたが、プランは方形とみられる。壁は約10cm残存し、北東部にわずかに側溝をみる。住居址東壁中央部で貯蔵穴を検出した。深さは床面より25cmをはかる。

出土土器の多くは細片であり、このうちから図示したものをとりあげる。高杯(第27図2)は杯底部から口縁部にかけて段を持ち、内外面ともハケを施す。壺(同図1)は直線的に外上方に伸びる口縁部である。また、5世紀代と思われる須恵器片(同図3・4)が出土した。

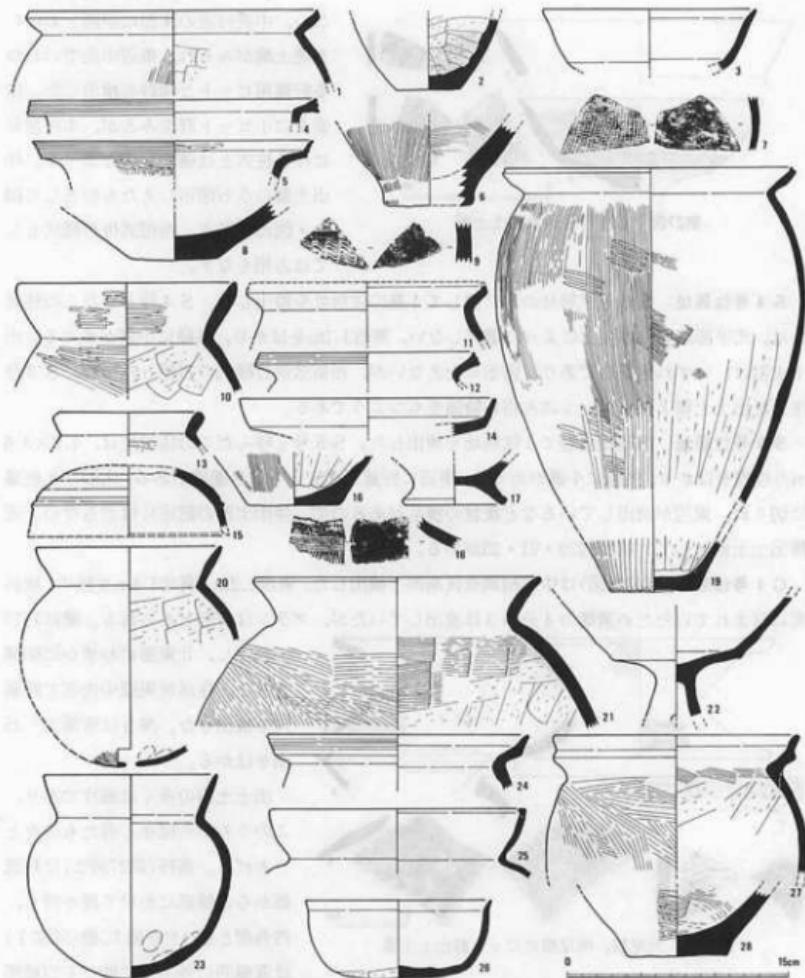
住居址の築造時代については、高杯(同図2)が形態、調整から布留式にあたる点を重視して、同時期を考えておきたい。

**N 1号住居址** 北尾根北東部で、住居址1基を検出した。このN 1号住居址は、地山の流出などによって遺存状態がきわめて悪い。規模はわからないが、外縁部には小溝がめぐる。出土土器はない。

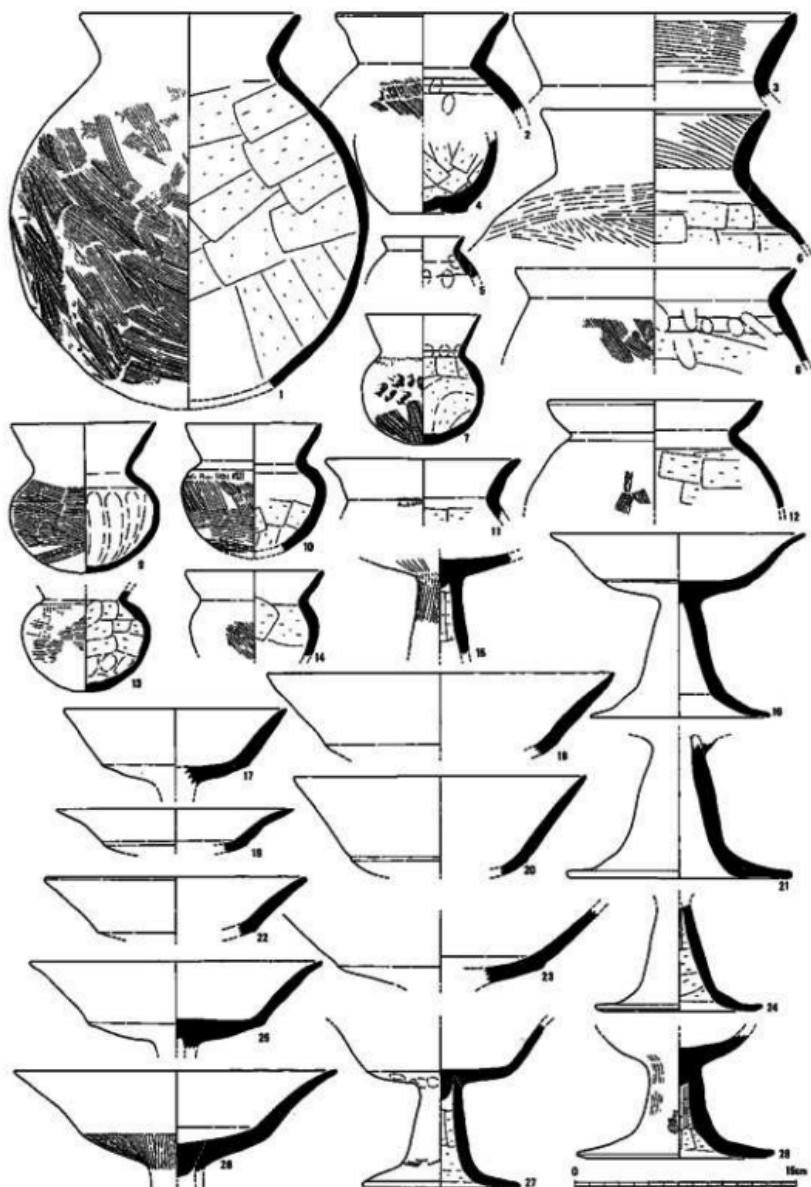


第28図 北尾根、南尾根のピット群出土土器

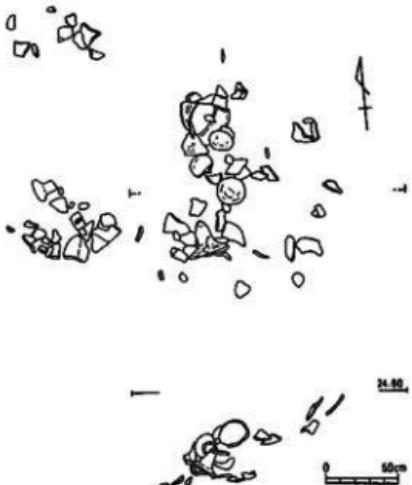
出土土器の多くは細片であり、このうちから図示したものをとりあげる。高杯(第27図2)は杯底部から口縁部にかけて段を持ち、内外面ともハケを施す。壺(同図1)は直線的に外上方に伸びる口縁部



第29図 北尾根、中尾根、南尾根出土土器



第20図 中尾根西斜面黒土層中の一括出土土器



第31図 中尾根西斜面黒土層中の土器出土状態

## 第5節 ピット群など

**ピット群** 北尾根、中尾根、南尾根の全域にわたってピットを検出した。これらは群在し、あるいは散在する。いずれにしても、建物の柱穴と断定しうるものに恵まれず、時期が判明するものもごく一部にとどまる。群在するものを尾根ごとに通観すると、南尾根では、発掘区の西端にそって、標高28.25m～29.25mの斜面に、円形のピットが密集する。そのほとんどが直径15～25cmをはかる小さいものであり、深さは5～30cmと一定しない。柵列かもしれないが、密集状況からは確定できない。南尾根北端西斜面にも列状をなすピット群がある。直径

20～50cmをはかる大型で、埋土中から布留式併行様式古相の土器が出土した。中尾根、北尾根のほかにも、西端部の斜面に小ピットが群集する。

**N 1号溝状造構** 北尾根発掘区の北端に位置する。L字形の溝状造構で、規模は、東側溝が長さ9.5m、幅0.6m、深さ0.27mをはかり北側溝は長さ4.8m、幅1.0m、深さ0.25mをはかる。なお、東側溝はその中央部を東西にはしる後世の溝によって切られている。

溝内より弥生土器の破片が出土した。17は長頸壺、20は短頸壺、21・22はともに壺底部である。17・20は弥生時代後期、21・22は弥生時代中期の所産である。

**黒土層出土の遺物** 発掘区西斜面の黒土層から各種の土器が出土した。以下、各尾根ごとに述べる。

北尾根の出土土器として弥生土器、土師器、須恵器がある(第28図、第29図)。壺(第29図1)は弥生時代中期、壺(第29図4、第28図5)は弥生時代後期のものである。器台(第28図1・2)は内外面にヨコミガキを施し、弥生時代後期に属する。底部(第29図2・6・8)のうち、6は外外面にハケを加え、2は内面にヨコハケを施す。高杯(第29図5)は京都府熊野郡久美浜町機爪遺跡の高杯D類<sup>⑨</sup>に類似する。小型器台(第28図3・4)は脚部内面にヨコハケを加える。高杯(第29図3)は土師器で、須恵器(第29図7・9、第28図7・8)、杯身(第28図6)も出土した。

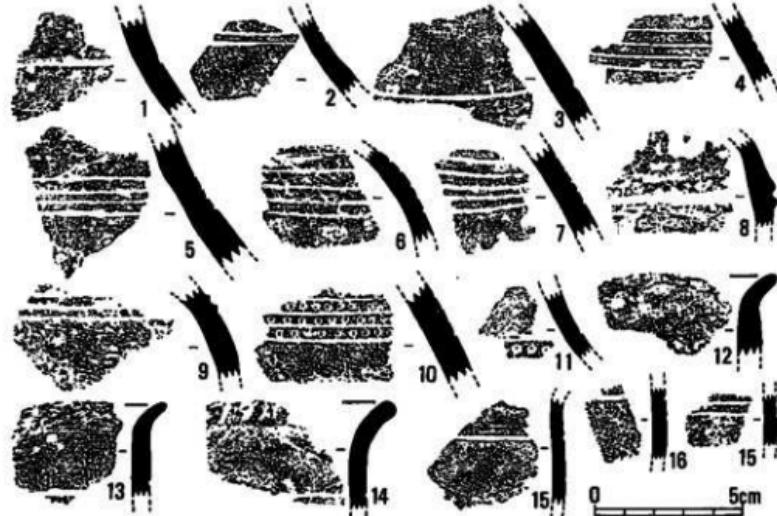
中尾根では表下約60cmのところから多量の土器が出土した(第29図、第30図)。壺(第29図11・19)は弥生時代中期のもので、19の外面にハケ調整をみるが、一部に調整前のタタキの痕を看取できる。現在のところ、丹後でタタキメを持つ弥生中期の土器の例としては、機爪遺跡S D21 IV層出土のもの<sup>⑩</sup>があげられ、IV様式に比定されている。当資料も口縁端部の形態などからIV様

式に属するものと思われ、したがって、タクキメをもつ中期の土器の類例をもう一つ加えることとなった。

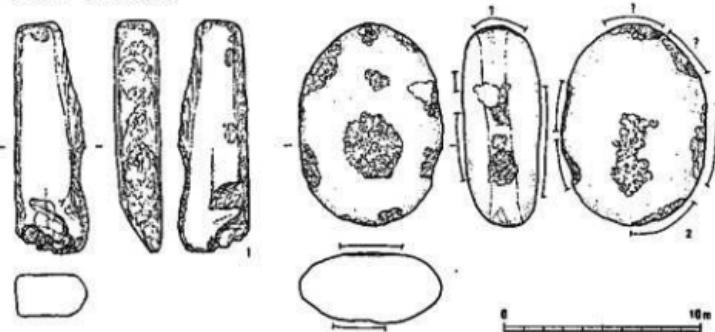
甕(第29図12)は弥生時代後期、高杯(同図14)は後期初頭のものである。底部(同図16)は外面にハケ、内面にケズリを施す。同図17は台付甕の脚部である。土師器の甕(同図10・13)は内面にケズリを加える。須恵器(第29図15・18)も出土した。15はMT15型式に属する。

次に一括して出土した土師器について述べる。土師器の甕(第30図1~6・8・11・12)は口縁部がくの字に外反するものである。ほとんどが外面にハケを加える。同図2・5以下は内面にケズリを見る。底部(同図4)は内面にケズリを見る。小型丸底甕(同図7・9・10・13・14)は外面にナメハケを施し、内面にケズリを加える。内面をナデのまま残す例(同図9)もある。ケズリには時計回り(同図7・14)と反時計回り(同図10・13)とがある。当資料は胴部上半に最大径が位置し、かつ口径を上まわる。高杯(同図15~28)は杯底部から口縁部にかけて段を有するものが多い。同図19は屈曲する口縁部を持つ。外面にハケを施すもの(同図15・26・28)もある。脚部は中ほどが少しふくらみ、にくく屈曲する。内面はケズリを施すもの(同図24・27・28)やケズリの後ナデを加えるもの(同図16・21)もある。これらの一括遺物は、京都府舞鶴市桑飼下遺跡第2号住居址出土土器<sup>10)</sup>、福井県大飯郡大飯町浜禪遺跡VII層出土土器<sup>11)</sup>の中に類例が見られ、布留式を4期区分した際のIII式<sup>12)</sup>に比定される。

南尾根では表土下約60cmのところから弥生土器と土師器が出土した(第29図)。甕(20・21・23)はくの字に外反する口縁部を持つ。23は内面にナデを施す。24は弥生時代後期の甕である。甕(25)は布留I式に近い。椀(27)は外面にケズリを施す。高杯(22)は段を有し、脚部は短かく開



第32図 弥生時代前期の土器



第33図 S 1号住居址出土の石器

き、穿孔が施される。これは布留I式に近く、S 3号住居址に伴う可能性がある。

## 第6節 その他の遺物

弥生時代前期の土器(第32図)今回出土した土器はほとんどが小片であり、いずれも造構に伴わない。以下、器種ごとに詳述する。1~11は壺である。1はハケによって低める段を持ち、当資料中もっとも古いと推定される。内面にはナデを施す。2~11には篦描沈線文をみる。2は外面にナナメハケを施す。3・4・7は磨滅が激しく調整は不明である。5・6は内面をナデで調整する。8・9は、磨滅しているが、貼付突帯文を確認できた。8は突帯端部に刻み目を有する。10・11は篦描沈線文間に竹管文を施す。第29図28は底部である。外面にヨコミガキ、内面は粗いハケを施す。

12~17は壺である。12は器壁が厚く、口縁部外面には指頭圧痕が看取される。13~17は篦描沈線文をもつ。13は外面にタテハケを見る。14は口縁端部にキザミメを有する。15は外面にナナメハケを施す。16・17は磨滅が激しく、調整は不明である。

奈良岡遺跡周辺では鳥取橋遺跡、家谷遺跡で前期の土器が出土している。特に鳥取橋遺跡では有段の壺があり、現在、丹後地方の弥生時代前期の土器の中では最も古いもので前期前葉に比定されている<sup>13)</sup>。1の時期を考えるうえで重要な資料となろう。また、竹管文を施す類例は、京都府中郡峰山町途中ヶ丘遺跡の出土土器などに求められる。当資料は形態、調整よりみて前期中葉～後葉に属すると思われる。

石器(第33図) S 1号住居からは磨製石斧と敲石が各1点出土した。磨製石斧(1)は砂岩を素材とする方柱状片刃磨製石斧である。刃部を中心によく研磨されているが、側面は細かい敲打痕様のものがみられ、やや粗い。特に図示した側面は、上半が節理によって階段状を呈し、下半には敲打によって形成された窪みをみる。これは、その上方にわずかに残る擦痕と共に着柄のためのものと考えられる。刃部両面に著しい刃こぼれがみられる。長さ11.9cm、幅3.6cm、厚さ

2.2cm, 重量165g。

敲石(2)は花崗岩と思われる梢円形の自然礫をそのまま用いる。両面及び周辺には軽微な敲打の集中によると思われる浅い窪みをみる。しかし図の右面及び周辺の一部に残るものは、敲打・風化のいずれによるものか判然としない。長さ10.5cm, 幅7.4cm, 厚さ3.9cm, 重量455g。完形。

#### 注

- 1) 戸原和人『丹後古殿遺跡の調査』(『第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』所収, 大阪, 昭和58年)。
- 2) 房宗寿雄『「山陰地域」における古墳形成期の様相』(『島根考古学会誌』第1集, 島根考古学会, 昭和59年, 松江), 東出雲町教育委員会, 「大木椎現山古墳群」(昭和54年, 島根県東出雲町), 参照。
- 3) 注1と同じ。
- 4) 安達厚三・木下正史『飛鳥地域出土の古式土師器』(『考古学雑誌』第60巻第2号所収, 東京, 昭和49年)。
- 5) 注1と同じ。
- 6) 中村孝行『青野遺跡第5次発掘調査概要』(『京都府綾部市文化財調査報告』第9集所収, 綾部, 昭和57年)。
- 7) 注4と同じ。
- 8) 石井清司編『橘爪遺跡発掘調査概報』(京都府教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概要」1981第2分冊所収, 京都, 昭和56年)。
- 9) 注6と同じ。
- 10) 渡辺誠編『桑劍下遺跡』(京都, 昭和50年)。
- 11) 酒詰仲男・石部正志・堀田啓一・白石太一郎『若狭大飯』(福井県大飯町, 昭和41年)。
- 12) 注4と同じ。
- 13) 釈龍雄『丹後半島における弥生前期の様相について』(『第9回埋蔵文化財研究会資料』所収, 大阪, 昭和56年)。

### 第3章 後論

#### 第1節 近畿地方北部の古式須恵器 —奈具岡遺跡出土須恵器の検討を通じて—

山田邦和

はじめに 奈具岡遺跡からは、今回の調査によって、17点の須恵器が出土した。そのうち、I期に編年できるものは6点ある。近年、京都府北部・兵庫県北部においても古式の須恵器の出土例が増加し、それへの関心も高まっているところである。そこで、本稿では、同地における古式須恵器の様相を概観し、その意義づけを試みる。

なお、編年については、須恵器編年のI期を三つに大別し、古い方から、I前期・I中期・I後期と呼ぶ。I前期は田辺昭三氏編年のTK73型式に、I中期はTK216型式・TK208型式に、I後期はTK23型式・TK47型式に、それぞれ該当する。これは、須恵器編年の大要をとらえるための呼称である。細分を要するばあいには、(古・新)をもってあらわす。また、「古式須恵器」とは必ずしも適切な用語ではないけれども、本稿では慣用に従い、I期の須恵器の総称として使用する。

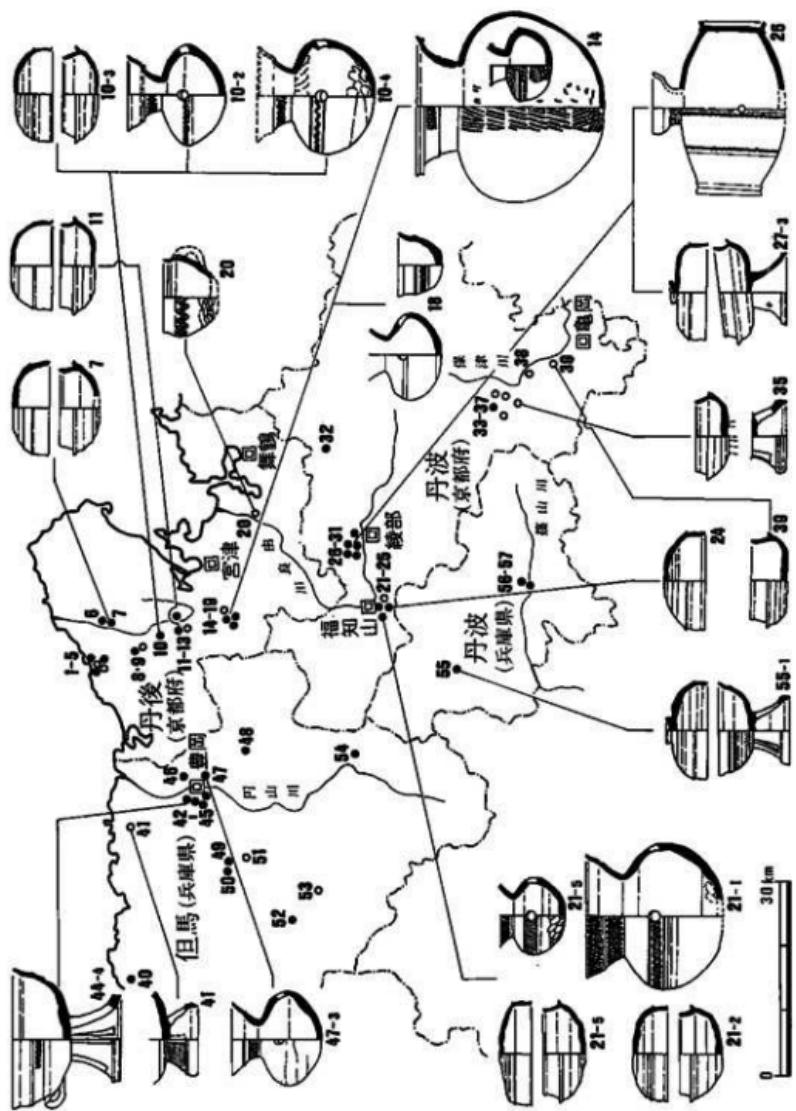
**奈具岡遺跡の須恵器** 奈具岡遺跡出土の須恵器でI期に属するものは、南尾根古墳出土の杯蓋(第15図6)、S11号土壙出土の杯蓋・杯身・高杯(第22図)である。これらの須恵器は、いずれもI後期(古)に属する型式的特徴を備えている。

第15図6の杯蓋は、稜が鋭く突出し、口縁部内面の段は水平に近い。天井部の回転ケズリ調整は丁寧である。これらは、I後期(古)の中でも古い要素である。第22図3の杯蓋は、口縁部内面の段が内傾する点に、やや新しい要素をもつ。第22図2に至ると、稜はほとんど突出せず、回転ケズリ調整もやや粗雑になる。器形もシャープさを失い、丸みをおびる。これらはI後期(古)としても後出の特徴である。

杯蓋と杯身は、第22図3が4と、同図2が5と、それぞれセット関係をなす。同図4の杯身は、5に比して体部が浅い。回転ケズリ調整も、4が丁寧である。器形の点でも、4はシャープであり、5は丸みをおびる。これらの点は、セットになる杯蓋の型式的特徴と、それぞれ一致している。

無蓋高杯(第22図1)は、杯部に二条の稜と波状文をめぐらす。脚部には台形の透しを三方にあける。型式的には、第22図3・4の蓋杯に併行するものであろう。

以上のように、奈具岡遺跡南尾根古墳・S11号土壙出土の須恵器は、同一様式に属しながら、わずかに新古の型式的特徴を有している。



第3表 近畿北部のⅠ期須恵器出土遺跡地名表

番号	名 称	所 在 地	時 期	番 号	名 称	所 在 地	時 期	番 号	名 称	所 在 地	時 期
京都府竹野郡船町											
1	向 地	道 路 尾 津 川	I後	18	近・白山古墳羣	後 野	I中	33	上木崎 古 墳	京都府船井郡懶部町	-3
2	同	3号 墳	小 溪	19	鶴 1号 墳	京 都 府 舞 韻 市	I後	34	岩谷 サイズ追跡	上木崎	46
3	勝	古 墓	溝 谷	20	桑 剣 下 道 路	桑 銅 下	I中	35	園 墓 無 墓 群	岩 谷	47-1
4	二	山 村	道 路	21	豊 富 丘 古 墓 群	曾 我 墓	I中	36	曾 我 墓 道 路	小山西町	-2
5	林	道 路	林	22	後 背 寺 古 墓 群	曾 我 墓	I後	37	善 順 号 道 路	曾我谷	-3
京都府竹野郡赤堀町											
6	济 風 閘	道 路 溝 谷	I後	-1	大 道 4号 墳	莊 今	I中	38	八木中学校裏	京都府船井郡八木町	-4
7	いもじ や 古 墓	谷	II	-2	5号 墳	庄 安	I後	39	八木中学校裏	兵庫県丹波篠山市	-5
京都府中郡峰山町											
8	細 谷 古 墓	安 間	I後	-3	13号 墳	庄 今	I前	40	水神山1号埠付	兵庫県美方郡浜坂町	46
9	途中ヶ丘	道 路 長 間	II	-4	18号 墳	田 12号 墳	I中	41	鬼 神 谷 無 墓 群	対 田 I	50
京都府中郡大宮町											
10-1	小 池	1号 墳 口 大 野	I後	-5	6号 墳	大 道 寺	I後	42-1	下 陰 5号 墳	兵庫県豊岡市	51
-2	2号 墳	中ヶ丘 道 路	I中	-6	7号 墳	正 明 寺	I後	42-2	6号 墳	兵庫県豊岡市	52
-3	5号 墳	鶴 王 寺	I後	-7	8号 墳	圓 楽 寺 道 路	I後	42-3	9号 墳	兵庫県豊岡市	53
-4	7号 墳	II	I後	-8	9号 墳	大 野 町	I後	42-4	7号 墳	兵庫県朝来郡和田山町	54
-5	10号 墳	美 大 野	II	-9	10号 墳	高 谷 3号 墳	I中	43	7号 墳	兵庫県米子郡山南町	55-1
11	光明寺裏山古 墓	美 大 野	II	-10	11号 墳	5号 墳	I中	44-1	1号 墳	兵庫県多紀郡根山町	56
12	萬 隆 道 路	周 只	I中	-11	12号 墳	6号 墳	I中	-2	2号 墳	II	57
13	大宮荒神社遺跡	周	II	-12	13号 墳	中山 古 墳	I後	-3	6号 墳	II	58
京都府与謝郡加悦町											
14	中 上 司 道 路	溫 江	I中	-13	14号 墳	田 坂 野 3号 墳	I中	-4	7号 墳	II	59
15	湯 鍋 古 墓 群	御 駿	II	-14	15号 墳	前 田 6号 墳	I中	-5	8号 墳	II	60
16	御 駿 代 神 社	御 駿	II	-15	16号 墳	豐 里 中 学 校 内	I後	-6	9号 墳	II	61
17	須 代 神 社	II	I後	-16	17号 墳	神 林 城 路	I後	-7	10号 墳	II	62

**近畿地方北部の古式須恵器出土遺跡** 近畿地方北部の須恵器研究は、從来、それぞれの地域において成果がまとめられてきた。古墳出土の古式須恵器については、杉原和雄<sup>1)</sup>が丹後および丹波北部のものを、瀬戸谷昭<sup>2)</sup>が但馬のものを、それぞれ集成した。須恵器窯については、加賀見省一<sup>3)</sup>が但馬の、杉原和雄<sup>4)</sup>が丹後および丹波北部の、筆者<sup>5)</sup>が丹後・丹波を含む京都府下のそれを、それぞれ概観している。

さて、丹後・丹波・但馬において、I期の須恵器を出土した遺跡を集成したものが、第34図および第3表である。以下、両図表の示す結果に注目していきたい。

この地域においてI期の須恵器を出土した遺跡は、多くが古墳である。そうして、出土古墳は、京都府小池古墳群・同府豊富谷丘陵古墳群・兵庫県北浦古墳群・同県七ヶ塚古墳群などにみられるように、規模が小さく、群在し、棺直葬を内部主体とすることがほとんどである。すなわち、I期の須恵器は、これら初期群集墳にともなうことが最も多い。

そのばあい、須恵器は、すべてが埋葬祭記、もしくは墳丘上祭祀に使用されたものであり、棺内または墓壙内に副葬された例はほとんどない。近畿地方北部で、須恵器の棺内・墓壙内副葬の普及は、II期にはいってのことである。

古墳以外の遺跡としては、集落址・祭祀遺跡・窯址がある。集落址には、I中期のものとして京都府千代川遺跡・同府中上司遺跡・同府桑飼下遺跡などが、I後期のものとして同府林遺跡・同府裏陰遺跡などが、それぞれあげられる。出土遺跡の数は、I後期にはいって増加する。祭祀遺跡としては京都府大宮亮神社遺跡が、窯址としては同府園部窯址群・兵庫県鬼神谷窯址群が、それぞれ存在する。

**近畿地方北部の古式須恵器** ここでは器種別に叙述を進めたい。まず、蓋杯について述べる。管見にふれる限りで、近畿地方北部の最古の須恵器は、京都府豊富谷丘陵古墳群の大字18号墳から出土した杯蓋である。この杯蓋は、天井部が扁平で、口縁部は丸くおさめ、稜は厚く丸い。天井部は回転ケズリ調整の上に回転ナデ調整を施す。こういった点でI前期に比定できる。I中期(新)のものとして、同古墳群の論田12号墳の出土例がある。つくりは丁寧で、シャープな印象を与える。I後期にはいると、蓋杯の出土例は増加する。奈具岡遺跡S11号土壇もその一例である。

鰐には、大型・小型・樽形の各種がある。I中期には鰐が多く、I後期にはそれにかわるかのように、蓋杯が増加する。大型鰐は小池7号墳・大道4号墳・京都府中山古墳・同府高谷6号墳などから出土した。前二者はI中期に、後二者はI後期に属する。樽形鰐は兵庫県森山遺跡・京都府以久田野古墳群から出土した。これらもI中期の所産である。とくに、前者はI中期(古)に属し、但馬地域での最古の須恵器である。小形鰐は、I中期のものが小池2号墳・兵庫県北浦17号墳・京都府伝白米山古墳周辺などから出土した。伝白米山古墳周辺例は無文であり、また、北浦17号墳例は頸部に、小池2号墳例は頸部および体部に、それぞれ波状文を施す。I後期の小型鰐は、論田12号墳・北浦15号墳・兵庫県小野小学校裏山古墳などの例を数えることができる。

高杯には、有蓋・無蓋の両者がある。有蓋高杯では、京都府高谷6号墳の出土例が注目される。同墳からは10個の有蓋高杯が出土しており、うち2個はI中期(新)に、8個はI後期(古)に属する型式的特徴を示す。脚部の透しは、前者が小さな正方形、後者が円形をそれぞれ呈する。

椀はI中期に盛行する器種である。近畿地方北部では、京都府桑飼下遺跡・同府伝白米山古墳周辺・兵庫県七ツ塚8号墳などの出土例がある。

小型甕には、京都府中上司遺跡・兵庫県鎌田東3号墳などの出土例がある。両者ともに、I中期に属する。前者は集落址の方形ピットにおさめられた状態で出土した。

**須恵器生産の開始** 近畿地方北部において知られる最古の須恵器窯は、丹波の京都府園部窯址群・但馬の兵庫県鬼神谷窯址群である。ただ、丹後でも、京都府中上司遺跡出土の小形甕(I後期・古)は、底部にハケ調整を施すことなど、形態・手法の特徴が特異である。これが、大阪府南部窯址群など畿内の窯の製品でないとするならば、近畿地方北部にもI中期に遡る窯址が存在する可能性を考えねばなるまい。

園部窯址群では約30基の窯址を確認しており、その下限は平安時代によよぶ。同窯址群で知られる最古の窯址は、I後期(新)に属する。しかし、古墳出土資料の中には、同窯址群の操業がI後期(古)にまで遡ることを示す証拠がある。同窯址群には、須恵質・土師質両埴輪を焼成した埴輪窯(徳慶寺埴輪窯)も存在する。同埴輪窯の時期は円筒埴輪編年のV期であり、園部窯址群の初現期にあたることが知られる。

園部窯址群にやや遅れて、丹波北部も須恵器生産を開始する。京都府福知山市猪崎の賀茂野窯址群がそれである。II前期とII後期の資料が採集されている。

但馬最古の須恵器窯址は鬼神谷窯址群である。操業はI後期(古)にはじまり、III初期によよぶ。これに次ぐ時期の窯は、養父郡関宮町三宅の中山窯である。この窯の須恵器は、II前期に比定しうる。

これらの須恵器窯が、どこまでの範囲を供給圏としていたかについては、明確な解答を与えるのがたい。しかし、現段階の資料では、園部窯址群は少なくとも丹波全域に、鬼神谷窯址群は少なくとも但馬東北部に、それぞれその製品を供給していたと考える。賀茂野窯址群のばあいも、近傍に、II前期に築造の中心がある福知山市猪崎の稻葉山古墳群が存在し、須恵器の供給を行なった可能性を指摘できる。もっとも、同窯址群が操業を開始してからも、畿内からの須恵器の搬入が停止したのでないことは、兵庫県七ツ塚6号墳出土須恵器(I後期・古)が、胎土分析によって大阪府南部窯址群の製品とされたことからも、知られる。

**古式須恵器と初期群集墳** 近畿地方北部では、木棺直葬などを内部主体とする小規模古墳が、群在して築造されている。ただしこの傾向は、丹後・丹波北部・但馬北部においてとくにいちじるしく、丹波南部・但馬南部ではやや顕著でないようである。

これら初期群集墳の築造は、古墳時代中期後半から後期前半にかけて、とりわけ著しい。兵庫県鎌田東古墳群などのように、その初現が前期の終わりにまで遡るものもあるけれども、一

一般的な群形成のピークは中期以降にある。また、京都府豊富谷丘陵古墳群・同府小池古墳群などには、群の一画に弥生時代もしくは古墳時代前期前葉の台状墓群が含まれるが、それら台状墓群と初期群集墳の間には、年代上の断絶がある。

中期後半にはいり、我が国で須恵器生産が開始し、やや時をおいて、近畿地方北部にも須恵器が搬入される。須恵器を受容した階層の問題を考えるばあい、京都府小池古墳群の調査結果<sup>6</sup>が興味深い。同古墳群は、総数約60基の円墳および方墳からなる初期群集墳で、うち11基を発掘調査した。古墳以外にも、古墳と併行する時期の土壙墓群を検出し、同古墳群の被葬者集団の階層構成を推測できる。そうして、11基の古墳中7基から須恵器が検出されたのに対して、土壙墓から須恵器が出土した例はない。これは、古式須恵器の所有に、階層による差があったことを示唆する。あるいはこれをもって、当地において須恵器がまだ貴重品であったとする意見があるかもしれない。しかし、近畿地方北部の古式須恵器出土遺跡のかなりの部分を初期群集墳がしめていることに注目するならば、初期群集墳の祭祀が、とくに須恵器をもちいる祭祀であったと想定することもできる。I中期の初期群集墳出土須恵器に應の例がめだち、I後期にいたって蓋杯が増加するのも、初期群集墳での祭祀の変化にともなうものと考えたい。すなわち、中期後半から後期前半にかけての近畿地方北部では、初期群集墳の祭祀と古式須恵器は、密接に関連していたといふ。

近畿地方北部の須恵器生産は、現状ではI後期を過らない。したがって、それより前の須恵器については他地域からの搬入を想定せざるを得ない。そのばあい、供給の大きな部分は、畿内の製品が占めていたと判断する。これは同時に、初期群集墳の被葬者が、須恵器を通じて、畿内との間にむすびつきをもっていたことを示す。

さて、丹後には、前期から中期のはじめにかけて、全長100mを超す大型の前方後円墳が、少なからず築造されたことが知られている<sup>7</sup>。竹野郡網野町網野の網野銚子山古墳(198m)、同郡丹後町宮の神明山古墳(190m)、与謝郡加悦町明石の蛭子山古墳(132m)などがそれである。しかし、中期後半をまたずに、丹後から大型前方後円墳は姿を消す。いっぽう、中期前半以降、近畿北部の多くの地域で初期群集墳が増加する。同地の初期群集墳は、規模が近く、出土遺物も、須恵器・土師器・鉄製農工具・鉄製武器(鎌・刀)などであって、等質的なり方をしめす。

以上の諸点は、中期において、近畿地方北部に政治的な変動があったことを示す。そうして、この変動とは、前期丹後勢力の退潮のあとをうけ、畿内政権が直接に初期群集墳の被葬者たちを組織する体制が成立したものと推測する。これは、「日本書紀」雄略17年3月条に記された、贊土師部を丹波・但馬などに設置するという記事とも、あるいは関連するのかもしれない。また、同地の初期群集墳が攻撃用鉄製武器をしばしば副葬していることは、この体制が一面では、畿内政権による軍事動員の性格を有していたことを意味しているのかもしれない。

そうすると、近畿北部の初期群集墳が古式須恵器をもつことも、単なるものの搬入として理解することは適当でない。それらは、初期群集墳の被葬者に対して畿内政権が分与したものであり、分与の目的は、初期群集墳で祭祀に使用することを主としたと考える。それは、新たな

古墳祭祀の枠組みによって、彼らを組織づけるものであったろう。

しかし、畿内から分与というかたちで須恵器が搬入された時期は、そうながくはなかった。後期前葉にはいり、園部・鬼神谷両窯址群が、在地の須恵器窯として操業を開始し、近畿地方北部に対する須恵器の供給の一部を受けもつことになる。これは、同地における須恵器需要の増大にともない、畿内から工人が派遣されたものであったと考える。

近畿地方北部の古式須恵器の搬入と須恵器生産の開始には、以上の政治的・社会的背景が存在していたことを強調しておきたい。

本稿執筆および資料収集のうえで、以下の諸氏・諸機関から御協力を賜わった。記して謝意を表したい。

(株)京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立丹後郷土資料館・綾部市教育委員会・与謝郡加悦町教育委員会・杉原和雄・佐藤晃一・安藤信策・中村幸行・松井忠春(順不同・敬称略)

## 第2節 まとめ

遺物として弥生時代前期から古墳時代後期に及ぶ広範な時期のものを検出した。また、遺構については、方形周溝墓、土壙墓、古墳、住居址、ピット群の存在を確認した。方形周溝墓は4基を数える、南尾根の方形周溝墓3基は、いずれも埋葬施設の検出には至らなかつたが、溝内出土の土器からみて、庄内式併行期にあたる。同期が古墳時代に入るのか、弥生時代にとどまるのか、見解の一一致をみない。古墳時代の開始のメルクマールとして、古墳という營造物の出現あるいはそこで実修されたと空想する首長権維承儀礼の創造を重視しようとする意見があり、また、古墳に葬られるべき有勢者による新しい文化活動の創出に注目する視点もある。葬送の問題よりも、存命中の文化活動を重視する立場からいえば、S2号方形周溝墓北溝内出土の定角式鉄錠はあきらかに古墳時代に属するので、溝中の土器は土師器となり、この方形周溝墓も同期に入ることになる。いずれにせよ、丹後における古墳時代開始期を土器様式の変遷のなかで位置づけるうえで、この鉄錠の資料的価値は少なくない。

住居址6基のうち時期の推測した3基は貯蔵用ピットをそなえ、古墳時代前期～中期に属する。貯蔵用ピットを設けた類例は、近傍では、京都府綾部市青野町青野遺跡にあり、このばかりは、弥生時代中期末から後期、および古墳時代中期の各住居址で確認されている。奈良岡遺跡のばかり、貯蔵用ピットが住居址の南または東の側壁にあることは、平地から吹きあげる冬の強い北西風を避ける処置であるのかもしれない。ちなみに、京都市山科区西野山・勧修寺の中臣遺跡においても、貯蔵用ピットは住居址の東～南壁側に集中する傾向がある。また、S1、S3号住居址で間仕切り用とおぼしき小溝を確認した。屋内の小溝は、畿内では弥生時代中期の円形住居址にさかのぼってみられるが、古墳時代前期の方形住居址で本遺跡でみられるような配置をもつ例を近畿では知らない。

古墳時代中期末または後期初頭にあたる古墳1基、土墳1基を検出した。これは、住居の廃絶後、奈具岡がふたたび墳墓の地として利用されたことを物語る。両丹地方では、同期に木棺直葬の小円墳の増加することが証明されている。たとえば隣接する加悦谷でも、その増加が著しく、京都府中郡大宮町口大野小池古墳群の様態もまたこれを証示する。奈具岡でふたたび墳墓を営むに至ったのは、両丹地方におけるこの現象とおそらく軌一にするのである。

さて、弥生時代後期において、丹後は、土器の面で、山陰から北陸に及ぶ擬凹線文地帯に包括され、また、墓制の面でも、平野をのぞむ尾根や丘陵上におびただしい数の方形台状墓または方形周溝墓を営む点で、山陰、北陸方面との共通性が強い。そのなかで、与謝郡野田川町比丘尼城で突線鉢5式銅鐸が、舞鶴市下安久で突線鉢3式の近畿式鐸、および三連式鐸が発見されており、また、丹波ではあるが、福知山市長田野宝藏山古墳群などで近江系土器が散見される。なお、弥生時代後期に近江・東海系土器の影響が少なくない福井県の南越盆地でも、三連式の前身という銅鐸が発見されている。その意味で、丹後以東の後期文化を考えるばあい、いわゆる日本海文化圏に包括される山陰方面との共通性に加え、近江・東海系文化の影響を念頭におくべきであろう。

話を戻すと、丹後にはじめて古墳文化の成立をみるのは、畿内よりも半世紀ほど遅れるようである。4世紀後半に比定される、中郡峰山町杉谷カジヤ古墳、与謝郡加悦町の白米山、蛭子山古墳、同郡岩滝町岩滝丸山古墳などを嚆矢とし、ついで4・5世紀の交を中心に、竹野郡網野町網野銚子山古墳、同郡丹後町宮神明山古墳、同郡弥栄町黒部銚子山古墳などの营造を見る。この間半世紀ほどは、丹後におけるいわば大古墳の時代であり、前方後円墳として全長198mをはかる網野銚子山古墳、全長190mの神明山古墳の規模は、畿内の同期の大型古墳に匹敵する。これは、前期畿内政権下における丹後の重要度が並々でなかったことを物語っている。

可耕地に乏しい丹後の地で、短期間に陸続と大型古墳の营造をみたことについて、被葬者達の強大な勢威の淵源を、日本海域における海上活動の管掌という面から説明しようとする試みがある。4世紀後葉に至り前期畿内政権による朝鮮との通交活動が頻繁の度を加えたという時代の背景を勘案するならば、この仮説は特筆にあたいする。このばあい、舞鶴市伊佐津切山古墳出土の鐵鎌に、大陸では北方系に属する一種の鑿頭式鎌が含まれていることは、注目しうるかもしれないが、上記の古墳で副葬品の内容の判明したものがなお一部に限られ、その面から被葬者達の活動の軌跡をたどる作業は多く今後に残される。

中期に入ると、前方後円墳の营造が急激に衰退し、规模の比較的大きい古墳としては、直径50mの円墳である竹野郡丹後町竹野産土山古墳、直径30mの円墳である竹野郡弥栄町鳥取ニゴレ古墳などがあるにとどまる。そのいくつかで副葬品の内容が知られており、そこで大陸とのつながりを示唆する器物をあげるとすれば、産土山古墳では、漢の環頭大刀の文様に系譜をもつ環頭刀子、甲冑などの武具類、ニゴレ古墳の武具類がある。いずれにしろ、中期畿内政権のもとでは丹後の重要性は著しく低下したことは疑いない。

ところで、北陸地方をみると、若狭では西塙古墳、越前では向出山1号墳、天神山古墳、二

本松山古墳、加賀では狐山古墳、和田山5号墳など、大陸系器物や甲冑を副葬品とする古墳が少なからず分布し、これらの古墳は概ね5世紀中葉～後半に比定される。前期畿内政権のもとでは、日本海側において、丹後の豪族が大陸へ通ずる海上活動のゆえに著しく重用されたとすれば、中期畿内政権下では、かわって北陸の豪族が通交活動を主導するに至ったのであろう。

大型古墳の時代を終えた丹後には、つづいて、木棺直葬の小円墳をさかんに営む群集墳の時代がはじまる。この種の群集墳を初期群集墳と呼んで分離するならば、たとえば奈良県橿原市新沢千塚などの形成から知られるように、畿内でもまた、ほぼ近い時期から初期群集墳の形成が隆盛をむかえる。そこで、丹後における初期群集墳のさかんな形成活動を畿内の事情と関連づけてよければ、これは後期畿内政権下の地方経営の問題として説明しうる。すなわち、群集墳の被葬者達を組織した有力勢力が構成の一翼を担い、官司制的専制体制として特色づけうる後期畿内政権下において、丹後では、有力勢力を介さずに広範な階層を組織する地方経営の新しい方策が進展をみたことになるのである。

#### 注

- 1) 杉原和雄『丹後地方における横穴式石室採用以前の須恵器資料』(『水と土の考古学』所収、京都、昭和48年)。
- 2) 瀬戸谷啓『但馬出土の初期・古式須恵器について』(『七ヶ塚古墳群』所収、豊岡、昭和53年)。同『但馬地域』(『日本陶磁の源流』所収、東京、昭和59年)。
- 3) 加賀見省一『但馬地方における須恵器生産の展開』(『よみがえる古代の但馬』所収、豊岡、昭和56年)。
- 4) 杉原和雄『京都府北部の須恵器生産について』(『丹後郷土資料館報』2所収、宮津、昭和56年)。
- 5) 山田邦和『京都府下の須恵器窯』(『マムシ谷窯址発掘調査報告書』所収、京都、昭和58年)。
- 6) 鈴木忠司・植山茂編『小池古墳群』(京都、昭和59年)。
- 7) 広瀬和雄・田中彩太・豊岡忠雄・遠藤隆曜『丹後地域の古式古墳』(同志社考古第10号、京都、昭和48年)。

## 付載

## 『史料綜覽』丹後國人名・地名・社寺名索引

藤本孝一

凡例：東京大学史料編纂所編纂による「史料綜覽」全17冊にみえる丹後國関係索引である。丹後國とある綱文を基にした。掲載されている史料名から類推出来ても、採用しなかった。この索引は一応の目安であって、綱文が利用している史料に当たってもらいたいと願っている。(○内は巻数、数字は頁、上下は段を示す。)

## 人物

- |  |   |
|--|---|
| あ 青砥康重 ⑥699上。  | 一色教親 ⑧25上, ⑨12上。                              |
| 赤沢朝経 ⑨183下。  | 一色政具 ⑥709上。                                   |
| 赤松則祐 ⑥699上。  | 一色満信 ⑪305上。                                   |
| 朝倉孝景 ⑩341下。  | 一色満範 ⑦257下, 258下, 316下, 319下,                 |
| 足利尊氏 ⑩108上, 127下, 196上, 403上,<br>410上, 543上。                             | 362上。   |
| 足利直冬 ⑥699上, 699下。  | 一色義有 ⑨166上, 171上, 174上, 183上,<br>184上, ⑪366上。 |
| 足利直義 ⑩172下。  | 一色義清 ⑨337下, 341下。                             |
| 足利義詮 ⑩400上, 411上, 458上, 463上,<br>465上, 474上, 490下, 501上,<br>645下, 699上下。 | 一色義質 ⑥25上。                                    |
| 足利義頼 ⑩341下。  | 一色義直 ⑧25上, 36下, 155上, 205上,<br>585上, 670上。    |
| 足利義教 ⑦594上。  | 一色義範 ⑦403上。                                   |
| 足利義政 ⑩260上, 402下, 585上。  | 一色義秀 ⑨64下。                                    |
| 足利義満 ⑩168下, 221上, 246上, 249下,<br>283下, 292下, 351上。                       | 一色某 ⑨286上。                                    |
| 足利義満妻 ⑦211上, 246上。   | 今川頼貞 ⑩160上。                                   |
| 足利義持 ⑦480下。  | 岩間彈正忠 ⑩421上。                                  |
| 飛鳥井雅俊 ⑨184上。   | 上杉朝定 ⑩108上。                                   |
| 尼子勝久 ⑩744上。  | 上杉頼成 ⑩160上, 172下, 213下。                       |
| 安嘉門院 ⑤138上。  | 上田入道 ⑩490下。                                   |
| 石田三成 ⑩233上。  | 上野頼兼 ⑩419下, 421上。                             |
| 石原兵衛三郎 ⑥463上。  | 榮譽 ⑩363上。                                     |
| 一色九郎 ⑩337下。  | 海老名了元 ⑦594上。                                  |
| 一色信長 ⑩269上。  | 円海 ⑩331下。                                     |
|  | 王丸兵庫允 ⑩678上。                                  |
|  | 大石基介 ⑩238下。                                   |

- 大内義隆 ⑥678上。  
 大館常安 ⑦594上。  
 小笠原長春 ⑦362上。  
 織田信長 ①228下, 262下, 285下, 305上。
- か 堀屋豊春 ⑥269上。  
 加藤清正 ③240下。  
 烏丸光宣 ③257上。  
 烏丸光広 ③199上。  
 河端兵衛三郎 ⑥419下。  
 紀伊重經 ④716下。  
 京極高知 ③285上, 298下, 305下, 312下,  
 313上, 333下, 334下, 339下,  
 ④40上, 259上, ⑤4上, 161下,  
 195下, ⑥10上, 18上。  
 京極高知女 ⑤161下。  
 京極高直 ①137下。  
 京極高広 ⑥10上, 18上, 160下。  
 京極高政 ⑥18下。  
 京極高通 ③259上, ④18上。  
 京極高三 ⑤18上, ⑥137下。  
 京極万作 ③259上。  
 久下貞重 ⑥411上。  
 久下時重 ⑥411上。  
 桜木一寿丸 ⑥699下。  
 桜木植綱 ⑥337下, 477下。  
 鹿谷直清 ⑥789上。  
 賢俊 ⑥410上, 458上。  
 光嚴上皇 ⑥331下。  
 幸増 ⑥419下。  
 高師詮 ⑥490下。  
 越界小四郎 ⑥490下。  
 後白河天皇 ④622下。  
 後藤基清 ④117下。  
 椎任光秀 ①228下, 262下, 290上, 295下,  
 305上, 353上。
- さ 左衛門尉某 ⑥699下。  
 里村昌弘 ②47下。  
 三条実望 ③184上。  
 自祐(尼・青砥康重後東) ⑥699上。  
 异清 ⑥699上下。  
 紹巴 ①290上。  
 白河法皇 ②666上。  
 新侍賢門院 ⑥472上, 521下, 532下。  
 摠津之親 ⑥260上。  
 曾清 ⑥699上。  
 曾祢好忠 ①491下。
- た 平某 ④775上。  
 平正盛 ②666上。  
 武田元信 ⑨183上, 184上, 166上, 341下,  
 417上。  
 武田元光 ⑨477下。  
 天竺賢実 ⑥269上。  
 道快 ⑦292下。  
 德川家康 ⑨148上, 245下, ⑩4上, 18下。  
 智仁親王 ⑨238下, ⑩161下。  
 富小路秀直 ③257上。  
 豊臣秀吉→羽柴秀吉  
 豊臣秀頼 ③240下。
- な 長岡玄曾 ①428下, 444上, ②7下, 47下,  
 ②76上, 140下, 169上, 185下  
 ③1上, 54上, 64上, 84上, 120  
 下, 124上, 134下, 148上, 155  
 上, 162上, 180上, 185下, 223  
 上, 233上, 238下, 240下, 257  
 上。→長岡藤孝, 長岡幽斎  
 長岡忠興 ①312上, 319上下, 340下, 366  
 上, 422上, 444下, ②1下,  
 148上, 346下, ③59下, 95上,  
 181下, 208上, 211上, 212上,  
 214下, 215下, 224下, 225下,

- 227上, 235上, 235上, 245下,  
247上, 251上, 271下, 276上。
- 長岡忠隆 ①227上。
- 長岡忠辰(光千代) ③214下, 225下, 250上。
- 長岡藤孝 ①262下, 266下, 285下, 290上,  
305上, 311下, 312上, 319上,  
356上, 360下, 374下, 377下,  
419上。—長岡玄旨・長岡幽齋
- 長岡幽齋 ①199上, 208上。—長岡玄旨・  
長岡藤孝
- 中院通勝 ①257上。
- 中原親能 ④117下。
- 二階堂政行 ⑥492下。
- 仁木頼章 ⑥463上。
- 西尾主馬 ③334下。
- 能有 ⑥160上, 172下, 213下。
- 延永修理進 ⑨341下。
- 延永春信 ⑨184上。
- は 羽柴秀吉 ①288下, 78下。
- 服部余次 ⑥699上。
- 日置小次郎 ⑥400上, 501上。
- 日置久季 ⑥25下。
- 浮玉 ⑦139下。
- 藤原家保 ②545下。
- 藤原資良 ②211下。
- 地名**
- あ 天橋立 ⑤138上, ⑦168下, 246上。  
余戸里 ⑥696下。  
阿弥陀峯城 ⑨184上。  
石河 ⑦362上。  
板浪 ⑥699下。  
伊祢保 ④117下。  
今熊野城 ⑨184上, 184上。  
芋野郷 ⑥699上。  
宇河莊 ⑥696下。
- 藤原忠実 ②545下。  
藤原為忠 ③126下。  
細川澄元 ⑨174上, 183下, 184下。  
細川忠興→長岡忠興  
細川忠隆→長岡忠隆  
細川忠辰→長岡忠辰(光千代)  
細川成之 ⑥22下。  
細川政賢 ⑨174上。  
細川政元 ⑥681上, ⑧183下, 184上,  
⑨184下。  
細川持常 ⑥22下。  
細川幽齋→長岡玄旨・長岡藤孝・長岡幽齋
- ま 松井康之 ①353上, ③240下。  
松田愛夜叉丸 ⑥474上。  
松田修理進 ⑥474上。  
松永長頼 ⑩508下。  
三好之長 ⑨183下, 184下。  
や 柳原資綱 ⑨95下, 108上。  
矢野藤一郎 ⑪305上。  
山名時氏 ⑥782上。  
山名義理 ⑦159上。  
山名義幸 ⑦108上, 112上。  
吉田兼和 ⑫140下。  
ら 龍獻寺某 ⑨723上。  
六角定頼 ⑨477下。
- 大内莊 ⑥331下。  
か 賀悦莊 ⑦594上。  
春日部村(志楽莊内) ⑥467下, 472上, 521  
下, 532下, 543上,  
⑦108上, 112上, 115  
下, 151上, 234下,  
283下。  
河上郷 ⑦257下。  
河上本莊 ⑥160上, 172下, 213下, 421上,

- 490下, ⑦159上, 258下, ⑧36  
下, 670上。
- 河部村(志樂莊内) ⑥465上。
- 木崎温泉 ⑤138上。
- 倉橋莊 ④775上。
- 倉橋城 ⑨341下。
- 黒戸莊 ⑥699上。
- さ 志高莊 ⑥546上。
- 志樂莊 ④117下, ⑥196上, 410上, 458  
上, 403上, 419下, 465上, 467  
下, 521下, 532下, 543上,  
⑦115下, 234下, 151上, 283下,  
319下。
- 曾我部莊 ④622下。
- た 田辺 ⑩47下, ⑪18上。
- 田辺城 ⑬233上, 235上, 238下, 240下,  
257上, ⑯287下。
- 多利村 ⑨417下。
- 丹後ノ領地(紀伊重鎌領) ④716下。
- 丹波郷 ⑧709上, ⑨12上。
- 社 寺 名
- あ 安國寺 ⑦139下。
- 石清水八幡宮(山城國) ⑥127下, ⑧205上。
- 大谷寺 ⑥54上。
- か 観音寺(室尾谷) ⑪312上, 319下。
- 久世戸祠(文殊堂) ⑭221上, 249下, 351上。  
→智恩寺
- 桂林寺 ⑪428下, ⑫185下, ⑬276上, 305  
下。
- 広隆寺(山城國) ②211下。
- 広隆寺桂宮院(山城國) ⑥546上。
- 範宮 ⑥54上。
- 金剛院 ⑪64上。
- 金剛心院 ⑬312下, ⑭508下。
- さ 西大寺(大和國) ⑥196上, 467下, 472上。
- 近重名(賀悦莊内) ⑦594上。
- 朝來村(志樂莊内) ⑥403上, 419下。
- 筒川莊 ⑧492下。
- 鳥取莊 ⑧290上。
- は 八田村 ⑧22下。
- 普甲寺山 ⑧269上, ⑨64下。
- 北條氏ノ属城 ⑤789上。
- 某莊 ⑥411上。
- ま 峰山 ⑩18上。
- 宮津 ⑦700下, ⑪290上, ⑫346下, ⑬  
199上。
- 宮津莊 ⑧159上, 653下。
- 宮津城 ⑨174上, ⑪340下, 366上。
- 宮津保 ⑧585上。
- や 八幡山城 ⑪262下。
- 弓木城 ⑩366上。
- 与佐郡 ⑧260上。
- 余保呂 ⑥699下。
- 与保呂村(倉橋莊内) ④775上。
- 521下, 532下, 543上, ⑦108  
上, 112上, 115下, 151上, 234  
下, 283下, 480下。
- 佐野別宮 ⑥127下, 699下。
- 三宝院(山城國) ⑥410上, 458上, 465上,  
⑨286上。→醍醐寺
- 地藏院(山城國) ⑦292下。
- 持明院御所(山城國) ④450上。
- 珠光庵(宮津) ⑩276上。
- 瑞花院(大和國) ⑨417下。
- 善法寺(山城國) ⑥699上下。
- 宗醫寺 ⑪285上。
- 懇持院(成相寺) ⑦292下。→成相寺
- た 醍醐寺(山城國) ⑥403上, 419下。→三宝院

- 大日姫宮 ⑥331下。
- 高沙社(山城國) ⑦319下。
- 多祢寺 ①312上。
- 智恩寺(文殊堂) ⑪360下, 444下, ⑫148上,  
⑬59下, 285上, 298下,  
313上。→久世戸祠(文  
殊堂)
- 長誦堂(山城國) ⑧653下。
- 長福寺(山城國) ⑥490下, ⑦159上, 258下,  
⑧36下, 670上。
- 長福寺塔頭(清涼院・藏龍院・瑞蓮院)  
⑥402下。
- 天龍寺雲居庵(山城國) ⑥696下。
- 東寺(山城國) ⑦403上。
- 等持院(山城國) ⑦700下, ⑧141上, 155上,  
159上, 585上, 653下。
- 洞林寺 ⑧22下。
- な 成相寺 ⑥25下, ⑦292下, ⑪311下。→  
懇持院
- は 東岩藏寺本初院 ⑦257下。
- 豊国社(山城國) ④40上。
- 法成寺(山城國) ②545下。
- 法華堂(山城國) ④622下。
- 本願寺 ⑫63上。
- ら 龍獻寺 ⑨723上。
- 龍勝寺 ⑪339下。
- 六波羅堂(山城國) ②666上。
- 六波羅蜜寺(山城國) ⑥331下。

# 図 版



上：奈良國遺跡遠景、下：北・中尾根発掘前全景

図版第2



上：南尾根発掘前全景。下：南尾根古墳発掘前全景



上：南尾根発掘後全景(南より), 下：南尾根発掘後全景(北より)

図版第4



上：中尾根発掘後全景、下：北尾根発掘後全景



上：S 1 号方形周溝墓西溝および S 2 号方形周溝墓南溝  
下：S 2 号方形周溝墓全景

図版第6



上：S 3号方形周溝墓全景，下：N 1号溝状造構全景



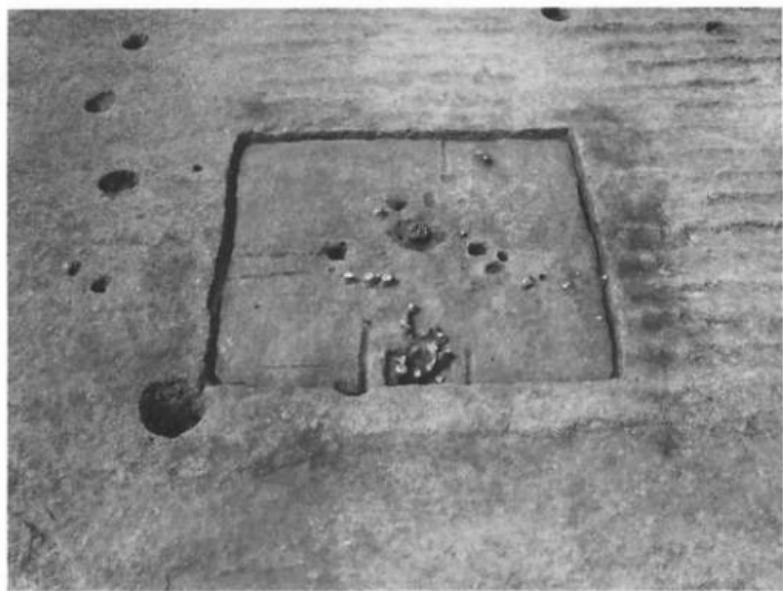
第1段左：S6号土坑、右：S1号土坑

第2段左：S10号土坑、右：S8・9号土坑

第3段左：S7号土坑、右：S2・3号土坑

第4段左：S4号土坑、右：N1号方形周溝墓主体部

圖版第 8



上：S 1 号住居址全景，下：S 1 号住居址遺物出土狀態

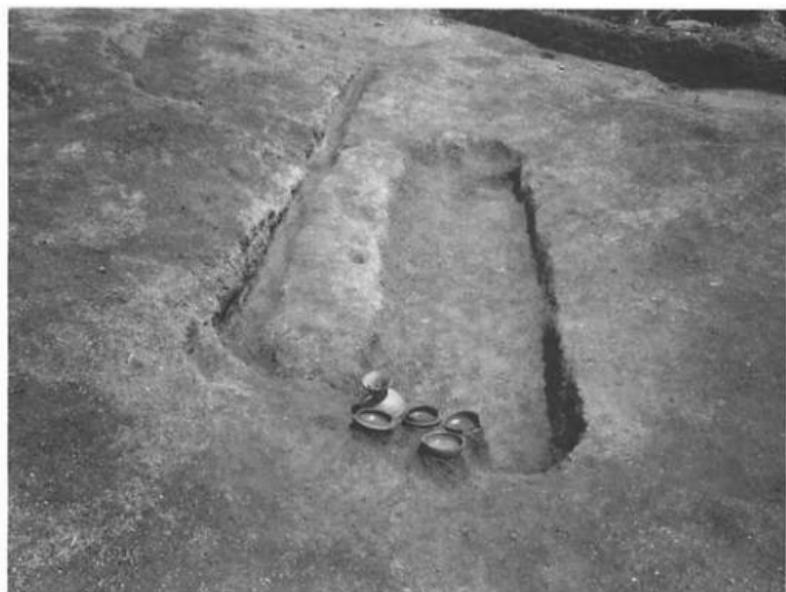


上：S 2・3・4 号住居址全景、下：S 5 号住居址全景

图版第10



上：C 1 号住居址全景，下：N 1 号住居址全景



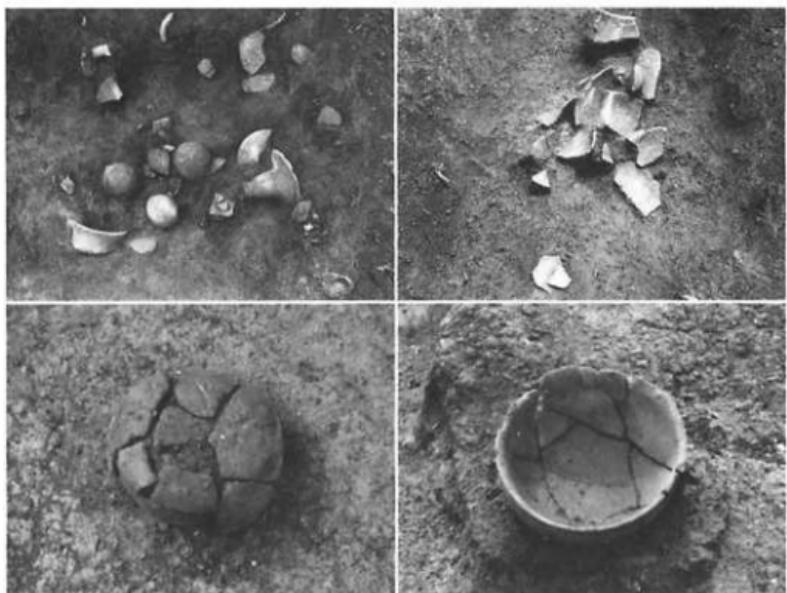
上：S11号土坑全景，下：S11号土坑土器出土状態

図版第12



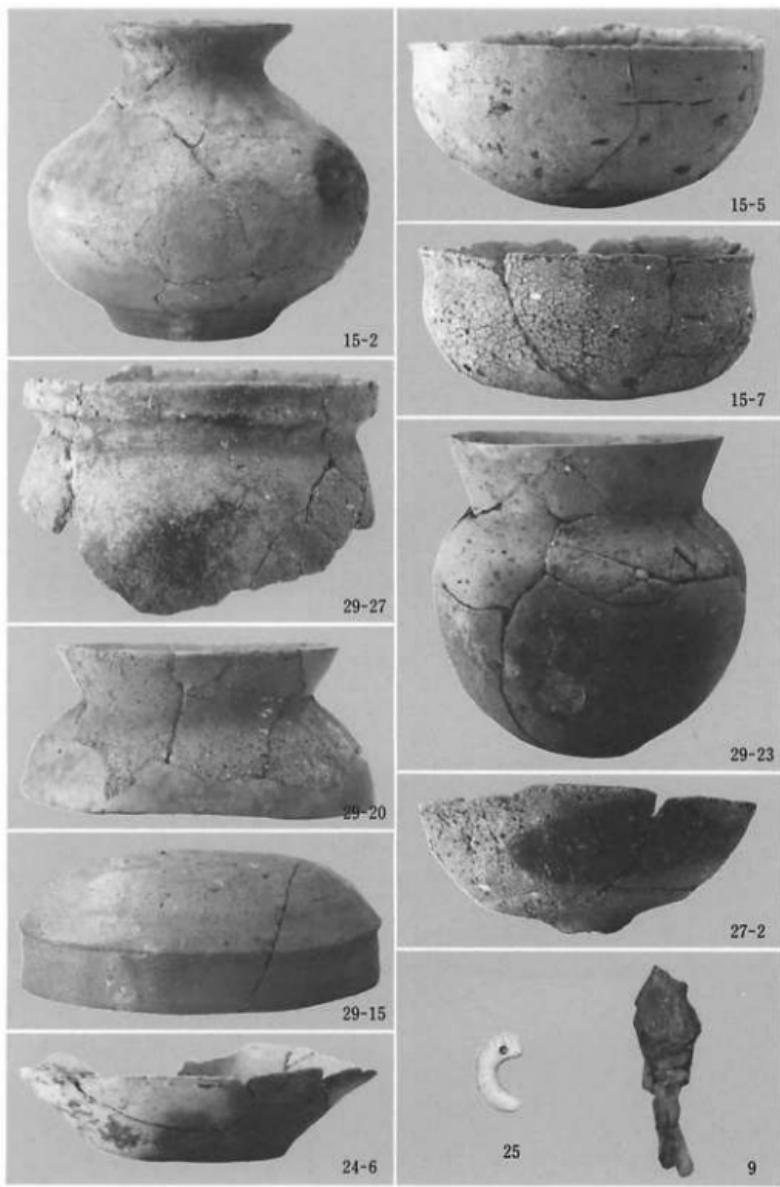
上：南尾根古墳周溝全景、下：南尾根ピット群全景

図版第13

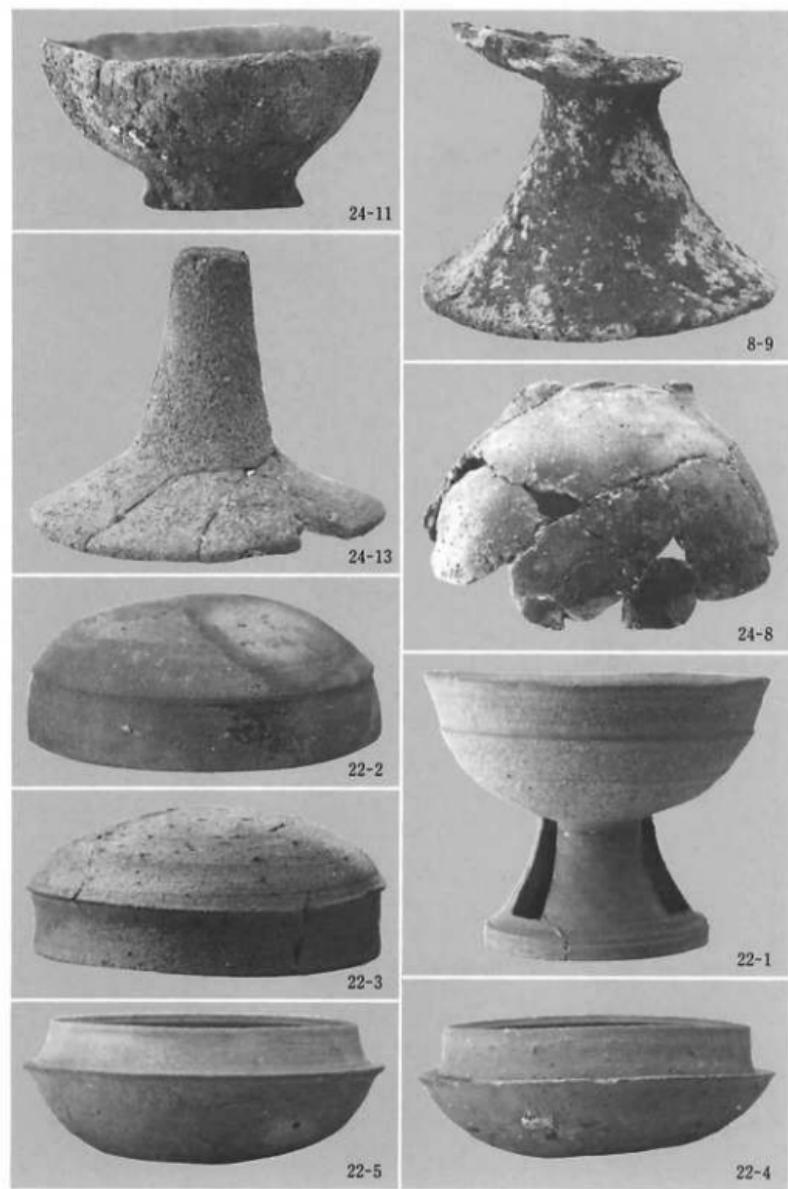


上段：中尾根西斜面土器出土状態  
中段：南尾根古墳周溝土器出土状態  
下段：発掘終了後全景

图版第14



古墳出土土器、勾玉、鐵鎌



住居址及び土坑出土土器

图版第16



中尾根出土土器

---

---

京都府弥栄町  
奈具岡遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和60年3月31日  
編集 平安博物館考古学第3研究室 川西宏幸  
発行 財團法人 古代學協會  
印 刷 東洋紙業株式会社

604 京都市中京区三条高倉  
TEL. 075(222)0888  
振替 京都8-850番

556 大阪市浪速区芦原1丁目3番  
TEL. 06(567)2111

---

EXCAVATIONS AT THE NAGUOKA SITE  
IN YASAKA, KYOTO PREFECTURE

THE PALEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXV